

会津人群像

2019
no.39

aizujin  gunzō

特集

リンゴ王国余市を築いた会津士魂
藩主の恩賜の陣羽織に似た
「緋の衣」リンゴの物語



戊辰一五〇年を終えて——

白虎隊

異国に散った会津娘『おけい』の悲しい物語

戊辰一五〇年を終えて——

白虎隊

石田明夫
飯沼一元

はじめに

飯沼一元

飯盛山は会津にとっては、鶴ヶ城と双壁をなす観光のメッカである。

幕末の会津藩を描いた大型テレビドラマはたびたび放映され、人気を集めているが、昭和六十一年十二月の日本テレビも平成十九年一月のテレビ朝日系も、タイトルは「白虎隊」となっている。

白虎隊が取り上げられる理由は、飯盛山での集団自刃が悲劇の象徴とされるからであろう。また、ドラマを牽引する主役はいずれも西郷頼母であるが、その理由は非戦論を唱えて失脚し、一族の女・子供二名の自刃という悲惨な結末を迎えたためであろう。

肝心の「なぜ自刃したのか？」の自刃理由については、白虎隊は城が落ちたと早とちりしたという「落城誤認説」、西郷家の場合は「足手まといになるのを避けるため」とされているが、「本当だろうか？ どうやって確認したのか？」と疑いたくなる。

『白虎隊自刃の図』の研究に詳しい福島県立博物館学芸員・川延安直氏はその小論文「初期白虎隊自刃図について」（文獻二）の中で次のように述べている。

刃、その後の顕彰に至る一連の動きを、貞吉が残した資料、その他の文献、および実地検証によってまとめてみたい。

執筆は「誕生・召集」、「自刃」、「顕彰」を飯沼一元、「戦闘」を石田明夫が担当する。

なお、白虎隊は士中、寄合、足輕を合せて約三〇〇名で構成されたが、本稿では飯盛山で自刃した士中二番隊を中心に述べる。また、貞吉は幼名で後年貞雄と改名したが、本稿では貞吉で統一する。

I 白虎隊の誕生から出陣まで

飯沼一元

(一) 白虎隊の誕生

慶応四年（一八六八）一月、薩長軍は京都・鳥羽伏見で幕府軍を相手に戦闘を開始した。新式銃と大砲で優位に立つ薩長軍に対して、指揮官不在の幕府軍は混乱を極め、会津軍も多数の戦死者を出した。

敗退し、大坂城に引き揚げてきた幕府軍諸將を前に時の將軍徳川慶喜は、「これより直ちに出馬せん。皆々用意せよ」と檄を飛ばした。ところがその夜、慶喜は約変し、会津藩主松平容保公の同行を強要し、幕府軍艦開陽丸で江戸に逃げ帰

白虎隊自刃の解釈は、それを語る者の数だけあることになる。……中略……白虎隊を自刃に至らしめた理由も自明のことではなく、真の理由は、当人たちにしか分からない永遠の謎に属するものであることを確認しておきたい。

つまり、「当人たちが」が残したものを手掛かりに、当時の会津がおかれた状況をできるだけ客観的に見直して、推定することが求められる。

飯沼貞吉は飯盛山で自刃した白虎隊士の中で唯一の生き残りである。筆者は貞吉の直系の孫に当たる。貞吉は手記『白虎隊顛末略記』（以下『顛末記』と略する）、および『白虎隊の人員』と絵画『白虎隊自刃の図』と『白虎隊奮戦の図』を残した（文獻二）。これらが、「永遠の謎」を解明する手がかりを与えている。

白虎隊に関しては、貞吉が寡黙だったため、根拠のない説が横行したきらいがある。

確かに、近年になって「白虎隊自刃者は六名だった」などという記事が本誌にも「異聞」として掲載されている（文獻三）。また、白虎隊の自刃理由については、未だに「落城誤認説」が定説となっている。

本稿では、会津白虎隊の誕生から、召集、出陣、戦闘、自

った。幕府軍は啞然とするばかりだった。

新政府軍は長州が捏造した錦旗を掲げ、佐幕派に朝敵・賊軍の汚名を着せ一気に東下を開始した。慶喜は江戸城明渡しと引き換えに駿府に帰り、徳川歴代将軍としては最長命の七六歳まで生きた。

一方、天皇に忠誠の限りを尽くしてきた会津にとって、錦旗は抗したい威圧となった。慶喜から使い捨てにされた会津藩の容保公は家督を養子喜徳に譲り、城外に蟄居して孝明天皇の義弟にあたる輪王寺宮を通して恭順を示すが、受け入れられなかった。

「会津は朝廷に至誠を尽くしてきた。逆らったことは一度もない。それが朝敵とは……」。

当時の会津人はこう思ったに違いない。

会津藩はこの国難に際し、急遽軍制を改革した。理不尽を正すには戦うしかない。

慶応四年三月、年齢別歩兵軍隊玄武・青龍・朱雀とともに白虎隊が誕生した。

この時の状況を柴五郎（後の陸軍大将、当時九歳）は『ある明治人の記録』（文獻四）の「憤激の城下」で以下のように記している。

明けて慶応四年二月二十二日、藩主容保公帰藩せるも登城を憚りて城下に謹慎す。

……二十七日、容保公、藩士に布告す。

形勢容易ならず……自分の不行き届きにより面皮を失候す。今般、討会の命諸藩に下り。一致一和にて何とかして国辱を雪具候様。

この布告を読み切齒扼腕せざるものなく、噂の真実なるを知りて怒るもの悲嘆するもの城下に満つ。街の様子喪に服せるがごとし。

余等幼きものとても悲憤やるかたなく、木刀もて手当たり次第立木を打ちまわり、小枝たたき折りて薄暮におよべるを記憶す。

三月三日、ああこの日こそ、母、姉、妹とともに迎えたる最後の雛の節句となれり。

例によりて雛壇をしつらえ緋の布をしきて、内裏様、三人官女、五人囃子など華やかに並びて、ちいさきぼんぼりに火をともし、いまだ蕾かたき桃の枝を飾れるさまなど、今も眼底に消えず。

「母上、内裏様は天子様なりと聞く、誠なりや」

と問えるに、母は余の眼を見つめてうなづけるのみなり。

かく天子様を祭ること例年のごとくなるに、朝敵よ、賊軍

永にわたり京都守護の任にありし会津藩士は、こと禁裏に關するかぎり声を飲みて語らず、もっぱら薩長の陰謀に唇を噛むばかりなり。

僅か九歳の子供にして、このやり場のない憤りである。成年武士および白虎隊士の怒りはそれ以上であつたろう。他どの藩にも増して天皇に忠誠を尽くし、多大な犠牲を払って京都守護職を務めた会津にとって、「朝敵の汚名」ほど理不尽極まりないことはない。会津藩が恭順を示しつつも、最後まで戦わなければならなかつた理由は、孝明天皇からいただいたご宸翰に示された会津の忠誠を世に正し、「会津は朝敵に非ず」を証明するためだつたと思われる。

「ご宸翰は孝明天皇から容保公宛に直接発行された手紙で、錦旗に対抗して潔白を証明するためのこの上ない拠り所であつた。

一例を次に示す。

堂上以下、暴論をつらね、不正の処置増長につき、心痛耐え難く、内命を下せしところ、すみやかに承知し、心配と悩みを払いのけ、朕の存念貫徹の役、まったくその方の忠誠にて、深く感悦のあまり、右一箱これを遣わすもの也。

文久三年十月九日

なお、堂上とは昇殿を許された四位以上の公卿のことであ

よと征伐を受くる道理なしと胸中の怒りたえがたく、母に訴えんとせるも、母の固き表情を見て思いとどまりぬ。

幼きものとしても理解しがたきことなり。宇内の形勢を大観し、大政を天皇に奉還して新政を開かんとし、総ての要職を辞して故郷の城下に謹慎し、幾たびか謝罪使を派して避けんと努めたるに、薩長の策士、禁裏の謀臣とはかりて明治幼帝を擁し、新政の主導権を握らんとすること明らかなれど、

る。

また、容保公が賜つた御製も残されている。

たやすからざる世に、

和(やわ)らくもたけき心も相生の

まつ落葉のあらず栄えん

武士とこころあはしていはほをも

つらぬきてまし世々の思ひて

(二) 白虎隊士の選抜

会津藩は歩兵軍隊を年齢別に区分し、玄武・青龍・朱雀・白虎の四神の名を付けた。

玄武隊の年齢は五〇歳以上六〇歳までで、その任務は国境警備。青龍隊の年齢は四〇歳以上、任務は後備軍。朱雀隊の年齢は一八歳以上、任務は先鋒軍とした。

白虎隊の年齢は一六歳及び一七歳で、任務は藩主の護衛である。

白虎隊は身分によつて士中・寄合・足輕の三種類に分類され、さらにそれぞれ二つの中隊に細分化された。隊員数は凡そ三〇〇名であつた。

そのうちの士中白虎隊には、藩校・日新館の学生の中から

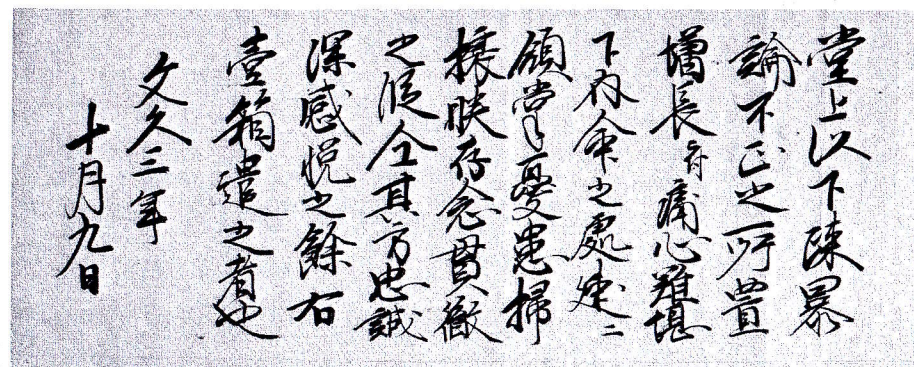


図1 孝明天皇のご宸翰 (松平家第14代当主松平保久様からのご許可を得て掲載)

身体強壯、技量優等のもの約八〇名が選抜されることになった。

白虎隊の編成時、飯沼貞吉はまだ一五歳（満一四歳）だった。どうしても入隊したい。背が高かった彼は嘉永六年（一八五三）生まれの一六歳だと偽って申請し、入隊に成功した。貞吉の従兄弟の山川健次郎は貞吉と同年の生まれであるが入隊できなかった。これが後の運命を分けることになろうとは知る由もなかったことだろう。

貞吉は、『白虎隊の人員』の「白虎隊士の選抜に洩れたる学生」の中でこう記している（文献二）。

白虎隊士の選抜に洩れたる学生は失望を抑えきれず、たびたび学校奉行もしくは教官に迫り、編入を願ひ出るが許されず、やむなく平常の如く学校に於て文武を講究せざるを得なかつた。

朝敵の汚名を着せられた理不尽に對して、憤懣やるかたない中で、年齢を偽つてまで入隊した気持ちがよく伝わってくる。

その背景には会津藩の教育がある。

貞吉は『顛末記』（文献二）の冒頭に教育之事として、以下のように記している。

三男は年長するも退館すること能わざりき。けだし年齢概ね十歳にして日新館に入りて読書を学び、十二歳にして習字をなし、十四歳より弓馬槍刀の四術を修む。又、定期試験ありて、その優等及第者には藩主より褒賞せらる。即ち習字に在りては硯、読書に在りては四書、小学、近思錄、且つ其の授与式には国老之れに臨み、優等及第者の父兄列席の上、その賞品を受く。故に年齢十六七歳に達するときは、多少文武の覚えなきもの寡なりき。

長男は試験に及第しなければ、家督相続できない、次三男は及第するまで卒業できないというのであるから、相当厳しい英才教育が徹底していたと思われる。

また、クラス編成については、

毛詩塾、三礼塾、尚書塾、二経塾の四個に分たれ、外一の大学校あり。後に幕臣林正十郎なる人來會あり、仏蘭西學を教授す。……中略……その組織は長幼の順序によりて成立し、団結尤も凝固なり。これ、善を責め惡を懲し、武士道を研く所の機關なり。

と記載されているので、団結力が強く、一致して武士道の研鑽に励んでいたことが分かる。

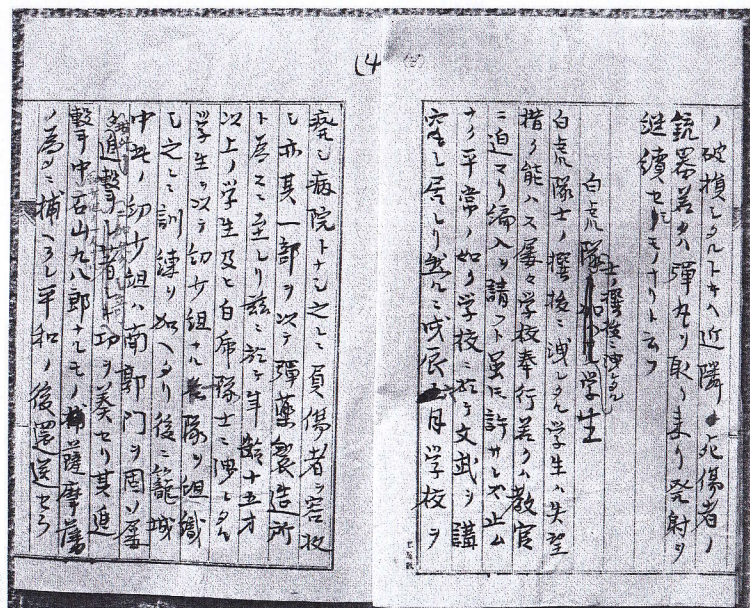


図2 『白虎隊の人員』の一部抜粋

藩立の學校を日新館と云えり。當時藩士の子弟はその身分階級に拘らず、読書・習字、ならびに、弓馬槍刀の四術必ずその館に就き修めざるを得ざるの制度なりし。

然らざるときは嫡子はその家督を相続すること能わず、次

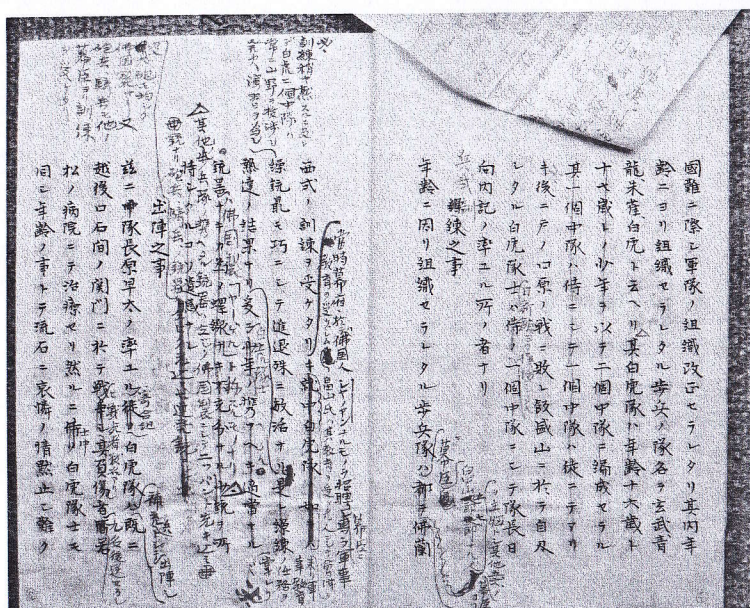


図3 貞吉が朱を入れた『白虎隊顛末略記』の一部

落城誤認説では、観光ガイドが、「隊長不在で子供たちだけだったから……」などと言いつけるのを見かけるが、彼らは若くして鍛えられ、大人の見識を身に付けていたことを見逃してはならない。これは、幕末期特有のことではなく、現

在でも、将棋の藤井聡太をはじめ、羽生結弦など、スポーツ選手には一四・一五歳にして技術のみならず立派な見識を備えた若者がいるのである。

(三) 洋式軍事訓練

貞吉は『顛末記』のなかで、兵式訓練之事として、以下の様に記している。

年齢に因り組織せられたる歩兵隊は、幕臣畠山五郎七郎なる一を主腦とし、其の他五、六の幕臣より仏蘭西式の訓練を受けた。当時幕府に於いては仏国人シャノアン（ヌ）なるものを招聘し、幕臣に専ら軍事教育を受けしむ。畠山氏はその教育を受けたる人にして、会津に來たり、軍事教育の任務を掌り。訓練稍や熟するに及んで白虎二個中隊は常に山野を授渉し、発火演習を為し、繰銃最も巧みにして、進退殊に敏活なり。ここに白虎隊士の携えたるは仏国製「ヤーゲル」と称すものなり。その他の歩兵隊の携えたる銃器は同じく仏国製にして、二つバンド先込め銃なり。砲兵、騎兵の銃器及び大砲も均しく仏国製なり。又、砲兵、騎兵も他の幕臣より訓練を受けた。

信の程を示したものであろう。

なお、西軍は元込め式のスナイダー銃を使ったので、弾丸の到達距離、精度、発砲速度で圧倒的な差があったと言える。

なお、酒井峰治の残した『戊辰戦争実歴談』（文献五）には、以下の記載がある。

慶応四年三月中、白虎二番士中隊に配属され、城中三の丸に於いて幕人畠山某ほか幕府旗下の士数名及び会津藩士柴五三郎氏ほか兩三名に就いて、三月中旬より七月七日までフランス式の軍事訓練を受けた。

七月八日、若殿（松平喜徳）に随従して福良村に出張中、毎日訓練を続け、その山中にて散兵し空砲を放ち、若殿に披露した。常用した銃は「ヤーゲル」で、これは火門が塞がり弾丸を発するのに苦慮した。……中略……

さて、八月二十二日に至り、敵軍が戸ノ口原に來るとの報告が入り、その日の十時頃に隊長日向内記の邸に同隊の者が続々と集まった。皆で「ヤーゲル銃は役に立たないので、別の銃を持って戦場に赴きたい」と城中の武器役人に申し出たが、「他には予備の銃しかなく、これらを渡すわけにはいかない」との返事だった。それを聞いて隊中に激怒する者があり、「無用の銃を持って戦場へ行けと仰るとは何事か、（性能の良い銃を貸さぬと言われるならば）貴方がたを殺し、我ら

つまり、当時幕府はフランス式兵法を導入し、幕臣に軍事訓練を実施した。会津藩の軍事訓練は、幕臣畠山五郎七郎が会津に來て実施したのである。なお、畠山は函館戦争で五稜郭で戦った人物。

白虎隊士に与えられた銃は先込め式の「ヤーゲル銃」である。なお、NHKの大河ドラマ『八重の桜』では、山本八重がうぶな白虎隊士に手取り足取り銃の訓練をしたかのようなシーンが登場するが、「常に山野で発砲演習し」とあるから、訓練も実戦に近いからだ。また、「繰銃最も巧みにして、進退殊に敏活なり」は自

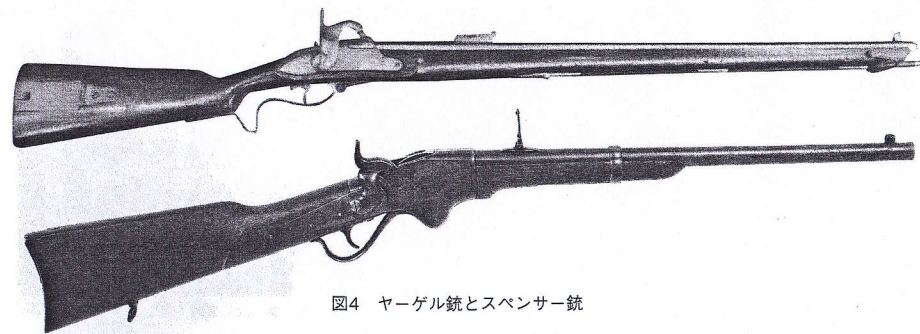


図4 ヤーゲル銃とスペンサー銃

も自決する」と大声で言い放ち、ついに馬上銃（マンソー銃か？）を受け取った。馬上銃は短くて軽く、我々白虎隊にとつて大変扱いやすいものだった。

八月二十二日は出陣の日であり、当日の交渉で馬上銃が白虎隊士全員に行き渡ったとは考えにくい。大多数は使い慣れたヤーゲル銃で戦ったと思われるが、使いにくく性能が悪かったことは間違いないであろう。

(四) 出陣の建議書提出

寄合白虎隊は七月十五日に越後方面に出陣した。この状況を貞吉は『顛末記』に以下のように記している。

ここに隊長原早太の率いる寄合組白虎隊は、補充兵として出陣し、既に越後口石間の関門に於いて戦い、戦死者数名あり。その負傷者九名後送せられ、若松の病院にて治療せり。然るに士中白虎隊士も同じ年齢の事として流石に哀憐の情黙止し難く、しばしば負傷者を病院に慰問し、親しく戦場の実況を聴き感慨一方ならず、且つ常に訓練を共にしたる寄合組白虎隊に後れたるとの感情を惹き起こし、今は血氣平生に倍加し、寸時も早く戦場に臨まんことを熱望せり。

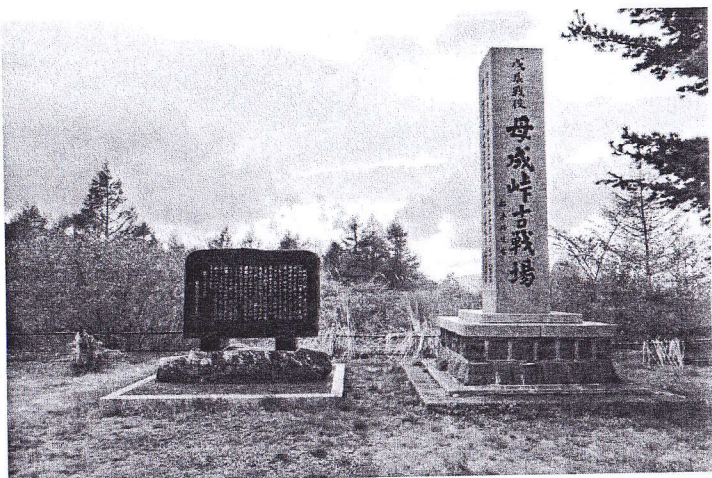


図5 母成峠

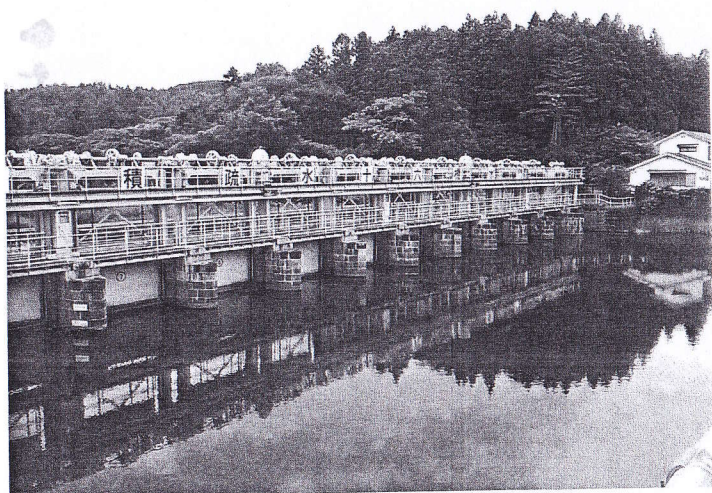


図6 十六橋

白虎隊士は、出陣の準備に取り掛かった。ここで重要なのは身支度に加えて、挨拶である。陸軍少佐平石弁蔵著『会津戊辰戦争』（文庫七）第四章一六には、『戸ノ口原の戦及び白虎隊の自刃』に註蘇生者飯沼氏の談として詳細な記述がある。平石はこれを出版するにあたって貞吉にも事実関係を問い合わせ、貞吉はこれに応じている。これによると、以下のようになる。

本丸に迫ってくる。会津の主力部隊は越後や日光といった藩境に陣を構えており、本丸は裸同然であった。容保公はこの危機に対して、自ら出陣する決意を固めた。

護衛隊の出番である。隊長日向内記の回章文が隊士達の邸に廻ってきたのは慶応四年八月二十一日の夜だった。回章文には翌日正午までに登城すべしと書かれていた。

建議書（例えば文獻六）

寄合白虎隊の負傷兵は血だらけだったに違いない。彼らを見舞って怖気づくかと思えば、逆に「血氣平生に倍加」したのである。日頃の訓練の為せる業であろう。さらに七月二十八日になると、土中一番隊は容保公に従い、高久村の本陣へ向かった。この時、土中二番隊は若殿の護衛を命じられ城で待機となった。そして、慶応四年八月初旬、若殿の護衛の為に留守部隊とされた事を不満に思っていた白虎士中二番隊のメンバーは、自分達もできるだけ早く出陣したいと願い、その方法を話し合う集会をもった。そこで、彼らは白虎隊を管轄する学校奉行ではなく、日新館主宰にして軍事奉行を兼任する家老の萱野権兵衛宛に建議書を出す事を決めた。起草委員は井深茂太郎と石山虎之助、筆を執ったのは井深である。井深が書き上げた「建議書」を、嚮導の篠田儀三郎と安達藤三郎が持参し、萱野に提出した。

儀三郎等頓首頓首再拜書を国老閣下に呈す。今や我藩強敵を四境に受け守衛之士防戦最も努むと。然れども戦機一步を誤り敵をして境内に入らしめば牙城危き事累卵も啻ならざるなり。而して守衛之士永く国境に在り後援なく苦戦数旬身神共に疲累す。進退亦往時の如くなる能はず。是れ某等生兵を

(五) 白虎隊の召集と出陣の挨拶

八月二十一日、藩境の母成峠が陥落した。会津藩の指揮は大鳥圭介で新選組の土方歳三らも参戦したが、多勢に無勢で止めようがなかった。敵は猪苗代から十六橋を目指し会津の萱野は当時数え一六、満一五歳である。これだけの文章を書き才能があった。元より英才の誉れ高く、起草は「茂太郎」で即決だったろう。後日、彼は飯盛山の自刃に際して、「城は落ちるはずはないので、帰城しよう」と主張するのである。

以て之に替り奮戦勇闘平常訓練の技を試み国家に殉ずるの秋なり。曩に学校奉行に面陣して出陣の事を以てせしも干今何らの命あるなし。在再曠日軍機を失うあらば臍を噬むも及ぶなけん。時機已に逼る。後命を竣つ暇あらず。敢て閣下に白す。某等の心志執奏あらん事を。頓首。恐惶恐惶。萱野権兵衛殿閣下

追伸 某等向ふ所の方面敢て自ら撰まず。只君命は竣つのみ。然れども敵兵の最も多き所敵情の最も萃まる所痛望の至りに堪へず。閣下幸に意を注ぎ某等の心事を憫みて容るるあらば則ち欣喜何加焉。再拜

井深は当時数え一六、満一五歳である。これだけの文章を書き才能があった。

元より英才の誉れ高く、起草は「茂太郎」で即決だったろう。後日、彼は飯盛山の自刃に際して、「城は落ちるはずはないので、帰城しよう」と主張するのである。

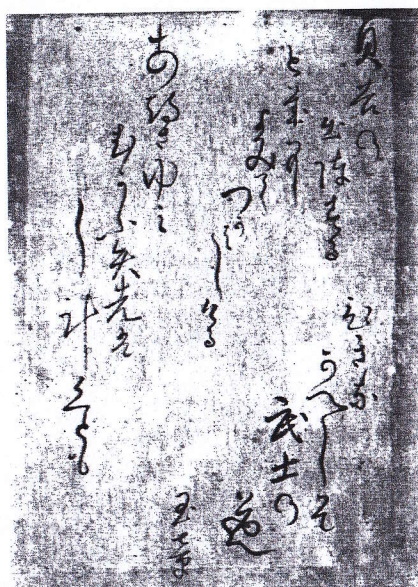


図7 色紙に書かれたあずさ弓の歌
貞吉の出陣するときによみてつかはしけると追記されている。

玉章^{たますけ}という雅号を持つ母のふみはその姉妹達も皆、優れた歌人であった。あらかじめ、用意していたのであろう。あずさ弓は「矢」や「引く」にかかる枕詞で、見事な韻を踏み、さすがに、この場面にふさわしい歌と言えよう。

貞吉はこの歌の意味を「引き返してはいけない。つまり死んできなさい」と受け取ったであろう。やがてこの一句が貞吉の生涯を制することになる。

なお、梓弓の歌は大正十三年に皇太子殿下（後の昭和天皇）が飯盛山を行啓されたときに披露され、殿下が口ずさまれたことが、ご案内役健次郎の手紙に出てくる（文献八）。

このような挨拶風景は、多くの白虎隊士の家庭でもされた

母ふみ「いよいよそなたが、お殿さまのために一命を捧げてご奉公する時が来ました。今日この家の門を出たならば、おめおめと生きて帰るような振舞いをしてはなりません。武士の子として目出度い門出なれば、先に西郷のおばあさまにお暇乞いをしておいでなさい」

西郷のおばあさまとは母方の祖母なほ子（ふみの母親で西郷十郎衛門近登之の妻）のことで、貞吉が大好きな祖母だった。

貞吉は本三ノ丁の祖母を訪ねると、なほ子は、母が縫ってくれたボタンの付いた黒羅紗の洋服に義経袴、脇差を腰に差して大刀は革紐で肩に掛け、ヤーゲル銃を手にした貞吉の凛々しい軍服姿を惚れ惚れと見上げた。

なほ子は筆と短冊を手に取り、さらさらと歌を一首したためた。

重き君 軽き命と知れや知れ

おその焔の うへは思はで

「年老いた老母のことなぞ思わずに、お殿さまの御為に命を捧げる覚悟でおはたらきなさい」と励ます内容の歌である。

しかし、貞吉はまさかこれがなほ子の辞世の句になるとは思ってもよらなかったであろう（※翌日、なほ子一家は諏訪神社で薙刀で敵と戦い、自害する）

貞吉はこの後、叔母の西郷千重子（父一正の妹で家老西郷頼母の妻）に挨拶に行くが、平石本にはこの時の会話内容は記載されていない。

白虎隊ドラマやオペラ白虎では、この時に貞吉と頼母との会話場面が登場する。

翌八月二十三日には西郷一族二名と白虎隊士が壮絶な自刃を遂げるのであるから、ドラマにとっては極めて重要なシーンと言える。

ただし、この時、頼母は佐幕派の水戸藩を率いて背炙り峠に出陣の命令を受けていたので、留守で貞吉とは会えなかったと思われる。

しかし、西郷一家とは親しい関係にあったので、叔母千重子とその家族に型どりの出陣の挨拶をしたと思われる。

家に戻ると、母ふみははなむけの歌を短冊に書きつけ、軍服の襟に縫いつけて送り出した。

あずさ弓 むかふ矢先はしげくとも

ひきなかへしそ 武士の道

ことであろう。この時期、男子は殆ど出陣して留守だったから、勇気付けて送り出したのは母親である。そしていずれの家でも武士道を鼓舞する挨拶が交わされたと思われる。

参考文献

- （文献一）「初期白虎隊自刃図について」川延安直 平成二十年三月三十日 福島県立博物館紀要第二二号
- （文献二）「白虎隊の戦闘行動と自刃の決定プロセス」飯沼一元 平成二十二年三月三日 会津人群像No.一六 歴史春秋出版
- （文献三）「白虎隊の真実」井上昌威 平成二十六年八月一日 会津人群像No.二七
- （文献四）「ある明治人の記録」石光真人 昭和四十六年五月二十五日 中央公論新社
- （文献五）「戊辰戦争実証談」酒井峰治 平成元年発見、平成五年白虎隊記念館寄贈
- （文献六）「札幌にいた白虎隊士——飯沼貞吉——」金山徳次 平成元年八月二十三日 限定出版
- （文献七）「會津戊辰戦争」平石弁蔵 丸八商店出版部 大正六年（昭和四年増補版）
- （文献八）「白虎隊士飯沼貞吉の回生」飯沼一元 ブイソーソリューション 平成二十四年十二月十三日



図2 飯沼貞雄が書かせた白虎隊奮戦の図。左手が白虎隊、立って指揮しているのは篠田儀三郎。右手は新政府軍。
絵師は梅里。原寸は41cm×107cm。

隊が布陣した図については、平成十五年発行の『会津若松市史七』（文献二）や平成十九年の『会津若松市史研究第九号』（文献三）において発表している。

さらに、白虎隊飯沼貞雄（明治時代に「貞吉」から「貞雄」に改名）が描かせた戸ノ口原の戦いにおける唯一の図である『白虎隊奮戦の図』（図二）や貞雄が書いた『顛末記』により、白虎隊の戦いの様子が明らかになってきたことにより、どのように両軍の部隊が動いたかを考え

また、二十三日早朝の戦闘後、戸ノ口原から飯盛山までの道よりも、どのようにして辿ったのか不明な点が多かったが『白虎隊奮戦の図』と残された『顛末記』やその他の文献により、少しずつ明確になってきたので紹介する。

(一) 母成峠の戦いと国境の陣地構築

慶応四年八月四日、新潟県では新発田藩が裏切り、五泉市の村松藩（三万石）が落城。六日には相馬中村藩（六万石）が、十一日には新潟県の村上藩（五万石）が降伏している。そこで、会津藩主の松平容保公は、八月一日から八月十四日まで、福島県西会津町の野沢宿に向き、越後方面のテコ入に当たっていたが、会津藩の東側、福島県の中通り方面の攻撃が激しくなったことから若松城へ戻った。

八月十四日『山岡義昭日記』によると、猪苗代湖の湖南にある会津藩と郡山との境となる御霊櫃峠で大砲での砲撃戦があった。十七日には、猪苗代湖南の舟津にいた新選組の土方歳三らは、猪苗代城に向かい、旧幕府軍の大鳥圭介と合流した。

この時西軍は、御霊櫃峠や国道四九号の北にある中山峠を攻めると見せかけて、母成峠を本命とする作戦を持っていた。

II 白虎隊の戦闘

石田明夫

はじめに

白虎隊が猪苗代湖の西岸、戸ノ口原において西軍と戦い、飯盛山に辿り着いたのは、旧暦で慶応四年（一八六八）八月二十三日（現在では十月八日）となる。戸ノ口原は現在の会津若松市河東町大字八田と会津若松市湊町赤井に位置している。河東町八田の強清水茶屋がある国道四九号北側は、会津藩が追鳥狩をした地域で大野原と呼ばれ、今でも国道を分断して高さ一・五mの土塁で囲まれている。西側の地は、石垣が積まれた御殿場がある区域から戸ノ口までを含む広範な区域で、二本松裏街道より北側の区域であり、強清水地区に含まれる地域である。二本松裏街道から南の区域は、会津若松市湊町に属する区域で、猪苗代湖岸や笹山本村まで広がる。福島県立会津レクリエーション公園が位置する場所周辺から国指定天然記念物「赤井谷地湿谷植物群落」までの付近は、笹山原と呼ばれ、分けられている。戸ノ口原とは、猪苗代湖で唯一、水路の出口となっている戸ノ口の十六橋から強清水地区の上強清水集落東側、菰土山や姥山と呼ばれている低丘陵までで、二本松裏街道沿いに位置した笹山原と大野原に挟

まれた区域である。白虎隊が戦ったのは、国道四九号南側、「夜泣き石」があり、「白虎隊奮戦の地」と書かれた大きな看板や西軍の慰霊碑、白虎隊戦闘の図がある会津若松市建設部道路維持所管の区域であるとされている。しかし、正確な戦闘の場所や会津藩の布陣、西軍の布陣については、詳細には分かっていない。



図1 白虎隊奮戦の地全景。正面が戦死98人の慰霊碑。

白虎隊の戦った場所については、『会津戊辰戦史』や『会津戊辰戦争』など、数多くの文献に記載されているにも関わらず、現地を詳しく調査した者がいなかったことから、石田が平成十四年に、文献をもとに強清水と会津レクリエーション公園周辺をくまなく調査し、会津藩が構築した陣地跡と西軍が構築した陣地跡を発見（文献一）したのであった。白虎

この作戦は、天正十七年（一五八九）六月に伊達政宗が会津に進攻した時と同じか、あるいは政宗の作戦を真似たものかもしれない。

八月十九日、大鳥と新選組らは母成峠に向けて到着した。二十日、西軍約四千名は、母成峠の南側入口の石筵口、中山峠の中山口、三斗小屋口の那須大峠、日光口の鬼怒川に分かれ、同一歩調で進むこととし、主力は母成峠を攻めることにしたのであった。主力となる石筵口の部隊には、一八小隊約二千余名がいた。

『会津藩大砲隊戊辰戦記』によると

「御霊櫃峠二柵ヲ設ケ、胸壁ヲ築キ作業中、石筵口敵来襲、会戦中トノ報アリ」

と、会津藩主力の大砲隊は、母成峠ではなく、南の御霊櫃峠にいた。会津藩家老田中土佐と内藤介右衛門らは、西軍は二本松から会津ではなく、仙台へ進攻するものと思い、判断を誤っていたのであった。

二十一日、母成峠には、会津藩ら八〇〇名がいて、頂上には会津藩の田中源之進がいたが、兵は猪苗代周辺から集められた農民がほとんどで、東の勝岩付近には旧幕府の第一大隊の大鳥と新選組がいた。大鳥は、八月三日に萱原で緩やかな母成峠頂上を見て、ここを守備するには

「たとえ精銳といえども二千余人が必要」（『南柯紀行』）

津藩が構築した塹壕跡と台場跡が今でも残されている。峠頂上の第三陣地には、防塁・塹壕跡と砲台跡が長さ約四〇〇mで残されている。

土方は、斎藤一とともに猪苗代城へ戻り『土方歳三書簡』で、夜五つ（午後八時頃）に、湖南にいた家老内藤と御霊櫃峠にいた第一砲兵隊の小原右衛門へ、すぐに来るよう手紙を出している。

「明朝迄二必、猪苗代エ押来り可申候間、諸口兵隊不残御廻し相也候様致度候、さも御座候無候ハ、明日中二若松迄も押来り可申候間」

二十二日の朝までに猪苗代へ押し寄せてほしい。そうしないと二十二日（明日）中に若松まで押し来るだろうと言っている。そして、猪苗代東岸から進行してほしいと連絡したのであった。会津藩の主力は、母成峠に西軍の主力が進攻してくるとは予想しておらず、中山峠や御霊櫃峠のある湖南に進攻して来るのではと予想していた。そのため、会津藩の大砲隊は御霊櫃峠にいたのであった。土方から手紙を受け取った会津藩大砲隊の小原は行動を開始するも、当時は雨であり素早く行動することができなかった。『会津藩大砲隊戊辰戦記』によると、猪苗代へ向かうか、戸ノ口の十六橋へ向かうか、素早く判断ができなかったことが記されている。

「会津藩砲兵隊に石筵口大敗し猪苗代城切迫の知らせ

と思った。人数も足らず農兵が多数加わる部隊では守れないと思っていたのだ。

大鳥が残した『南柯紀行』には、

「六つ半頃（午前七時）なりしか、東方に当り砲声二発聞えたり。是れ敵来るなり」

とある。朝七時に西軍が南の石筵から進攻してきた。西軍は石筵から本道母成峠へ進み、東側は大玉村から勝岩方面に進行して来た。

郡山市熱海町石筵にある顕彰碑に、獵師の道案内記録が残されている。獵師の橋本次郎七は、薩摩藩川村隊を西の葵沢から道案内をしたというのだ。川村隊は山中を案内されて進んだが、到着した時には、戦いは西軍の勝利で終了していた。また、『七年史』によると、大鳥は、東の勝岩方面へ移動し、勝岩の下にいた旧幕府軍第一大隊と新選組、土方とともに

「敵群り至り、彈丸雨よりの甚だしく」

と、激しい銃撃戦があったことが記されている。北原雅長の『史談会速記録』によると、会津藩一番総頭の源之進が峠の頂上にいて、石筵川を隔てた立岩（勝岩）に大鳥がいて、立岩の下では新選組の土方が戦争をしていたという。その時間は午前十一時頃だったという。

会津藩は、離山の現在牧草となっている附近に三段構えに第一陣地を中軍山と八幡山に第二陣地を築いた。そこには会

が届く。只野村に派遣せる三分番隊を峠に呼び返し、我が隊は猪苗代方面へ応援の命あり、一同下る頃は、早くも猪苗代方面に当り火災起り砲声を聞く。浜路村に引上げ来れば初夜（午後八時頃）過ぎに及べり。猪苗代か戸ノ口十六橋に迎ひ戦ふべきかの議論決しない内、敵早戸ノ口に来襲するの聞こえあり。急速本道に引帰すべきに決し、浜路を発し福良に向ひたる頃は卯ノ刻（午前七時頃）に及べり。峠を引き上げ至しては、運送する日暇なく、砲は山間荆棘の内に隠匿し輜重を捨て退却す。ことに朝げの大雨は進退に大困難を為せり」

会津藩の判断や行動が遅かったため、大砲隊は猪苗代や戸ノ口の十六橋へは間に合わなかったものであった。

『七年史』によると猪苗代城内では二十二日、猪苗代城代の高橋権太夫が、

「西軍大兵を進めて、猪苗代を襲ふ。守将高橋権太輔（夫）は、見櫛山の祠官桜井豊記をして、祖廟の神霊を奉じて若松に赴かしめ、城に火して退きけり」

『史談会速記録』によると、

「西軍は少しの猶予もなく大兵を進めて直ちに猪苗代城を襲撃。其の時、猪苗代城の隊長の高橋権太夫と云う者は、とても一小隊位の者でおった所が、何の効もないことを諦めて、自分は城に火を掛けて引上げたというこ

とです」

とある。高橋は、小隊の五〇名ほどでは猪苗代城を死守できないと思ひ、宝物を本城へ送り、土津神社とともに火を掛けて引き上げてしまったのである。『会津戊辰戦史』には、

「虎の下一刻（午前五時頃）、西軍大挙して猪苗代城を襲う。城代高橋権太夫、土津神社宮司桜井豊記に神霊を奉じて若松城に赴き、火を社殿と城塞に放ち退く。永岡権之助と和田八兵衛は急を知らせる」

と、二十二日の早朝には、猪苗代城が西軍によって占拠されたのであった。

母成峠敗北の知らせは、すぐに城内に到着した。『戊辰回顧談』によると

「早朝、家並の御触が参る。即ち、十五歳以上、六十歳以下の男子は皆、夫々得物を持って即刻、御三の丸へ詰めよという命令であった」

その時、それでも兵力が足りないことから臨時招集された敢死隊がいて『懷旧談』によると、

「八時頃、石筵が敗れたという知らせがあり、次いで戸口原に逆戦しろとの命令が下り、同輩三人とともに隊長日向内記の家に先ず行きました。殿様は御帰城になりましたが、元より城中には壮兵が四辺に出陣して若松に残る者は士中白虎二番隊と、衝鋒隊、敢死組といつて、

ト定り。大寺方ニハ桑藩ヲ出スヘキニ議定シ」

会津藩の精鋭部隊は母成峠以外の勢至堂や山王峠などの国境にいて、城下を守ることは不可能だったため、西軍が迫るなか、『会津戊辰戦史』には、

「西郷頼母、家において、登城し、猪苗代戸ノ口方面を佐川官兵衛に白虎、奇勝、回天、敢死、誠忠の諸隊に十六橋を壊して防御を命じる。大寺方面は、萱野権兵衛は、敗兵を収めて猪苗代に回るべし。桑名兵二百余人を属し日橋を焼いて防御を命じる。冬坂方面を西郷頼母は水戸兵百五十人を率いて防禦すること。萱野権兵衛午ノ刻（正午）大寺に向い、前方に胸壁を築く」

とあり、『若松記』では、

「近習ノ輩ヲ從ヒ二十一日午ノ刻（正午）鶴城ヲ出馬シ給フ、供奉ノ輩ニハ執政佐川官兵衛先乗シ、御刀番和田伝蔵、野村甚兵衛、伴番頭城取新九郎、山崎代之進、小性伴番三役其他近習ノ面々、用人ニハ笹原源之進、軍監ニハ黒河内式部、一柳翁介、大観察竹村助兵衛等也、又近衛隊ニハ白虎士中隊頭日向内記、小隊頭山内蔵人、同柴佐太夫、同水野助之進、半隊頭佐藤駒之進兵士ヲ引率シテ從ヒ」

とあり、諸文献によると、戸ノ口原には佐川官兵衛と白虎隊、奇勝隊、回天隊、敢死隊、誠忠隊、衝鋒隊、新選組がいた。

誰でも敢死組となれば百石に召し抱えると云うので、町人百姓の気強い者や、今の破落漢の様なもので成立たつ者と、三隊しかありませんので其混乱狼狽は、一方でありません」

と、戦える兵がいなかったことがわかる。「敢死組（隊）」の兵力は町人農民が多く、百石で召し抱えるとの約束で戦いに参加したことから、訓練や戦いの経験も無く、それでも槍を持って行ったという。実際に、会津若松市町北町藤室においては、敢死組に参加し、戸ノ口原の戦いになると恐ろしくなり、後退し、二日ほど隠れ、生家に戻ると、二十五日高久から会津藩の城下突入によって家は燃やされて無くなっていたという。

（二）戦闘前日の布陣

八月二十二日、『薩藩出軍戦状』によると、西軍の薩摩藩は母成峠を出発し、猪苗代町の木地小屋で休息し、各隊は十六橋を越え戸ノ口まで進軍した。

城下では『若松記』によると、二十二日早朝

「城中混乱防衛ノ軍議略定、猪苗代上ハ街道ハ戸ノ口十六橋ヲ引テ守戦ノ策、佐川官兵衛総督、下タ街道大寺方ハ萱野権兵衛馳向ヒ、敗兵ヲ馳リ集メ差向フヘキニヤ

南の赤井・笹山原には、西郷頼母と水戸兵。大寺・日橋には、萱野権兵衛と桑名藩が布陣し、日橋を焼いて落とし、大寺に「胸壁」と呼んでいた塹壕を構築したのであった。

『若松記』によると

「瀧沢村方ヲ本営ト定メラル、田中土佐等伺公ス、桑名候モ見兵ヲ從ヒテ本営ニ来リ給、長岡藩兵、飯野藩兵応援見兵トシテ合テ四十人計リ瀧沢ニ来ル」

とあることから、本営は瀧沢本陣であり、そこには、家老の田中や桑名藩主の松平定敬公がいて、長岡藩兵と飯野藩兵四〇名が応援部隊としていた。

さらに『若松記』では、白虎隊に対して、

「防戦ノ備トシテ、差向ケベキ兵隊モナケレバ、戸ノ口原備トシテ、白虎士中隊ヲ出ス外、他ナシト、君公、近衛ヨリ先鋒ニ差向ケラレ、日向内記、兵引卒シテ申ノ刻（午後四時頃）、大野原二出張、丘陵ニオイテ要害ヲ構ヒ、其外、城下屯集ノ募兵、奇勝隊上田新八郎引卒、十六橋ニ向フ。唐沢八四郎等十四、五人率ヒ、同戸ノ口原出張シ、胸壁ヲ構ヒ敵ノ来襲に備フ。藤沢内蔵之丞等入夫ヲ引率、強清水ニテ尽力、大野原方胸壁築造ヲナス」

また、『顛末記』では

「午ノ刻（正午）の頃、石筵口の敗報若松城に達するや、隊長日向内記率いる士中白虎隊戸ノ口表へ出陣の命令を

「午後三時頃に至り、戸ノ口を目指して進行し、滝沢村御本営にて、家老の佐川官兵衛に会い帰城を命じられる。(二十五日に中軍護衛隊として結成される一三歳から一五歳のもので約四〇余名いた)」

一五歳以下の少年たち四〇数名は、午後三時頃出撃したいと滝沢本陣へ向かうと、官兵衛から城へ帰るように命じられたという。白虎隊より若年の者も戦場に行こうとしていたの

とあり、選抜されて斥候に行っている。

また、八月二十五日に新設された部隊の『中軍護衛隊』によると、

「午後三時頃に至り、戸ノ口を目指して進行し、滝沢村御本営にて、家老の佐川官兵衛に会い帰城を命じられる。(二十五日に中軍護衛隊として結成される一三歳から一五歳のもので約四〇余名いた)」

一五歳以下の少年たち四〇数名は、午後三時頃出撃したいと滝沢本陣へ向かうと、官兵衛から城へ帰るように命じられたという。白虎隊より若年の者も戦場に行こうとしていたの

門を繰り出した。滝沢まで若殿が御供を致した。御本陣に着くと半分だけ戸ノ口へ向かえと命令があった。建白した結果一同進軍のこととなり、強清水に着いたのは日のくれぐれであった。津田を斥候に出した。人影のあるらしければ、ほふくして偵察した」

小隊長の水野や佐藤の行動は良くわかっていない。というのも、佐藤は戊辰後北海道の余市へ渡ったが多くを語っていないからだ。一方、原田隊は夕方、斥候に出ている。『辰のまぼろし』では

「斥候隊は、原田半隊長以下井深茂太郎、有賀織之助、鈴木源吉、城取豊太郎、笹原伝太郎、遠山雄午、多賀谷彦四郎の七名」

とあり、選抜されて斥候に行っている。

また、八月二十五日に新設された部隊の『中軍護衛隊』によると、

「午後三時頃に至り、戸ノ口を目指して進行し、滝沢村御本営にて、家老の佐川官兵衛に会い帰城を命じられる。(二十五日に中軍護衛隊として結成される一三歳から一五歳のもので約四〇余名いた)」

一五歳以下の少年たち四〇数名は、午後三時頃出撃したいと滝沢本陣へ向かうと、官兵衛から城へ帰るように命じられたという。白虎隊より若年の者も戦場に行こうとしていたの

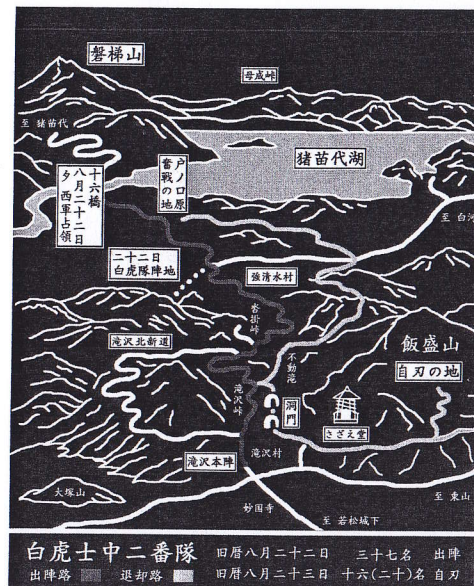


図3 白虎士中二番隊の出陣・退却図。飯盛山戸ノ口洞門に設置された彫刻石。

続テ隊々布陣シ白虎隊等大野原丘陵二備」

「懐旧談」には、

「強清水に着きましたのは日暮頃で、大砲の音がする毎に気が締まる様でした。其の處等は、大野原で、これを過ぎれば戸ノ口原となり、敢死組、衝鋒隊は左翼に散り、白虎隊は右手の谷地で散兵を張りましたのは、夜の十二時頃で、二十二日夜の暗さは、暗し、一寸先も見えず、隊長の号令の暗の中で聞こえ、その上少し前から降った雨は益々げしく、其の大雨の烈しさと云つたら想像しようもない位で、身体はビシヨ濡れとなり誠に辛くございました」

二十二日の天候は雨ですます激しくなり、大雨で全身びしょ濡れの悲惨な状況であった。

白虎隊は、士中二番隊が戸ノ口原に行ったのかというと、白虎隊には士中一番隊と二番隊があり、正午までに武器を用意し、三ノ丸へ詰めよと命令が出される。当時藩主の警護は、一番隊と二番隊が交互にあたつていて、その日は二番隊が当番だったことから士中二番隊が滝沢本陣へ出陣することになった。『原田勝吉談』によると、

「(正午頃) 城内に詰め、中隊長が日向内記、小隊長が山内蔵人に水野勇之進、半隊長が自分(原田)と佐藤駒之助(進)であった。軍方より良い鉄砲を受け取り城

である。

『顛末記』によると、白虎隊は

「君公に従って蚕養口に出る。塩見常四郎が戸ノ口原より駆け付け出兵を促す。半隊を先に進める、残り半隊も合流し、舟石茶屋にて銃に弾丸を込め、携帯品を茶屋に預け、駆け足で強清水を過ぎ、約一丁半(本村ではなく、清水のある場所から)行き、左肩の小山(菰土山)に登りここに穴を堀り胸壁とした。時に官兵は四、五丁(実際は約七〇〇mから一km)の距離を隔てて数千人いるのが認められた。十五、六人の幕兵がラッパを吹き敵軍に向かっていた」

とあり、丘陵に胸壁を築いたのであった。

同様のことは戸ノ口原から生き残って城に入った白虎隊の酒井峰治が残した『戊辰戦争実歴談』にも書かれている。

「君公ニ從シテ蚕養口ニ出ツ。時ニ塩見常四郎戸ノ口原ヨリ駆セ来リ、出兵ヲ促スコト甚ダ急ナリ。乃チ半隊ヲ先瀧澤東ニ進ルリ、又、繼テ其半ヲ進メテ前半隊ニ合セシム。戦友皆喜、躍シテ瀧澤峠ヲ越ヘ、舟石ニ達スレバ、敵軍大砲ノ声、耳ニ入ル。依テ舟石茶屋ニ於テ、丸込ヲ為シ、携帯品ヲ舟石茶屋ニ預ケ、特ニ身輕装トナリ舟石茶屋ヨリ駆け足ニテ強清水ヲ過キテ、約一丁半行キテ、左方ノ小山(菰土山)ニ登リ、茲ニ穴ヲ堀リ胸壁ト

為ス」

つまり、『顛末記』は『戊辰戦争実歴談』をもとに、飯沼氏の体験を加えて修正されたものとみられる。西軍はすでに十六橋を越え進軍したことから、旧幕府の衝鋒隊がラッパを吹いて突撃していたのであった。

白虎隊は、滝沢本陣において昼に、容保公から出撃命令を受け戸ノ口原に向けて出発し、上強清水の東側の孤土山には、午後四時頃に到着した。この場所は、現在は木が生えているが、当時は会津地方の薪などの燃料をとる場所で、木は生えていない笹原で、猪苗代湖岸、十六橋がある戸ノ口集落から西軍が進んでくると思った二本松裏街道や頼母がいた会津若松市湊町、赤井宿の間屋田中家までも良く見える場所であった。

八月二十二日『若松記』によると、

「日向内記、兵引率シテ申ノ刻（午後四時）大野原ニ出張、丘陵ニオイテ要害ヲ構ヒ」

とあり、白虎隊は戸ノ口原ですぐに丘を削り、三段の細長い平場となる陣地を構築したのであった。さらに、会津藩の急ごしらえの部隊奇勝隊の上田新八郎らは、猪苗代から出る唯一の日橋川出口にかかる十六橋へ向かったのであった。会津藩の唐沢八四郎らも戸ノ口原で胸壁（塹壕）を構築し、藤沢内蔵之丞らも大野原にも胸壁を築造した。これらは、現在、

強清水東の丘陵から国道四九号の北側にかけて八カ所残る塹壕跡を指すものと見られる。

会津藩の『原田勝吉談』によると

「（正午）頃城内に詰め、中隊頭が日向内記、小隊頭が山内蔵人に水野勇之進、半隊頭が自分（原田勝吉）と佐藤駒之助であった。軍事方より良い鉄砲を受け取り城門を繰り出した。滝沢まで若殿が御供を致した。御本陣に着くと半分だけ戸ノ口へ向かえと命令があった。建白した結果一同進軍のこととなり、強清水に着いたのは日のくれぐれであった。津田を斥候に出した。人影のあるらなければ、ほふくして偵察した」

とある。城内から良い鉄砲を受け取りとあるが、七連発を含むそのほとんどは射程距離三〇〇mで先込めのヤーゲル銃であった。そして、強清水に着くと津田捨蔵を斥候に出したが、人影がすでに見えたのであった。『辰のまぼろし』では偵察はさらに続き、

「原田半隊長以下、井深茂太郎、有賀織之助、鈴木源吉、城取豊太郎、笹原伝太郎、遠山雄午、多賀谷彦四郎」

の七名がさらなる偵察に行ったのであった。

『会津戊辰戦史』には、

「申ノ刻（午後四時頃）日向内記、大野原に至る。奇勝隊の上田新八郎は十六橋に向う。誠志隊の樋口友衛は

胸壁を戸ノ口原、強清水、大野原に築く。郡奉行の牧原奇平は食糧役夫を供給する」

とある。白虎隊は、夕方四時頃に、大野原に到達、奇勝隊はすでに十六橋へ向かっていた。誠志隊は戸ノ口原、大野原、強清水と広範囲に「胸壁」と呼ばれる塹壕などの陣地を築いていたのであった。さらに、郡奉行の牧原奇平は、食糧の供給にあたっていて、その食糧基地は、後に白虎隊も目指す会津若松市湊町赤井の小坂にあった。小坂は、南に湊町一帯の水田地帯が広がり、笹山原と戸ノ口原に展開する会津藩の部隊に食糧を供給するのには良い位置にあった。

『顛末記』によると、

「駆け足で強清水を過ぎ、左肩の小山（孤土山）に登り、穴を掘り胸壁を構築した」とある。戸ノ口原と母山原に残る会津藩の陣地跡は、当時、胸壁と呼んでいたもので、人の腰の高さほどになる溝が掘られ、その土を溝の前に積み、胸の高さまでなる土塁状の高まりを備えていた。いわゆる塹壕である。また、『若松記』

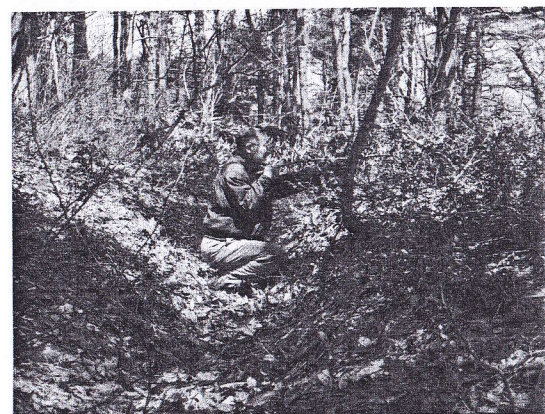


図4 戸ノ口原・姥山塹壕跡

区別している。

白虎隊は「大野原に出張、丘陵において要害を構え」、城下の兵と奇勝隊は「戸ノ口原出張し胸壁を構え」、藤沢隊は「強清水にて尽力、大野原胸壁築造」とある。白虎隊は、戸ノ口原ではなく、大野原の丘陵に「要害」を築いたのであった。要害とは、戦国時代の山城の造り方で、丘陵を段々に削平した細長い平場で構成されるもので、上から下を見渡すことから溝の必要がないものである。

現在、強清水側の丘陵周辺には、八カ所の陣地跡が確認さ



図5 戸ノ口原・孤土山陣地跡

m、孤土山には、四〇mと三八mの塹壕跡や平場跡の二本が残っている。

『顛末記』や『戊辰戦争実歴談』にある強清水を過ぎ、約一丁半行った左側の小山とは、いわゆる「孤土山」であり、そこに登り、胸壁を掘り、『若松記』にある要害を築いたのである。孤土山には、その時掘られた陣地跡が、山城の平場のように細長く三段の平場が街道を見下ろすように残されている。頂上は平らに削平された平場となり、その下に、長さ三五mあり、その下に長さ一七mの塹壕とまではいかないやや溝状となる平場がある。

なぜこの場所かというと、現在は木が茂り、見通りが開かないが、当時は、会津若松の草刈り場であり、薪を取る場所であったことから木が全く無く、萱化やや笹の原であった。そのため、孤土山からは、湊町赤井の頼母がいた赤井宿が良く見え、頼母側の状況も伺えたのであった。ここに白虎隊が二十二日いたのであった。

西軍を防戦する策として、日橋川にかかる十六橋は要地であり会津藩でも防御を意識していたが、『若松記』によると

「十六橋ヲ引テ防戦ノ策ナリケレハ、奇正隊頼リ二橋ヲ毀ントスル処、輒チ取払フコト不能、僅二橋板ヲ引テ戸ノ口原ノ地形ニ布陣ス」

奇勝隊が、急いで十六橋を壊そうとしたが、僅かに橋板を

れている。本村の上強清水東の給水塔のある場所、上強清水東の丘陵、孤土山、八幡山、姥山、国道四九号北側に陣地跡が存在している。孤土山は白虎隊が構築し、孤土山より東の戸ノ口原は奇勝隊らが構築、国道四九号北側は藤沢隊らが分担し構築している。

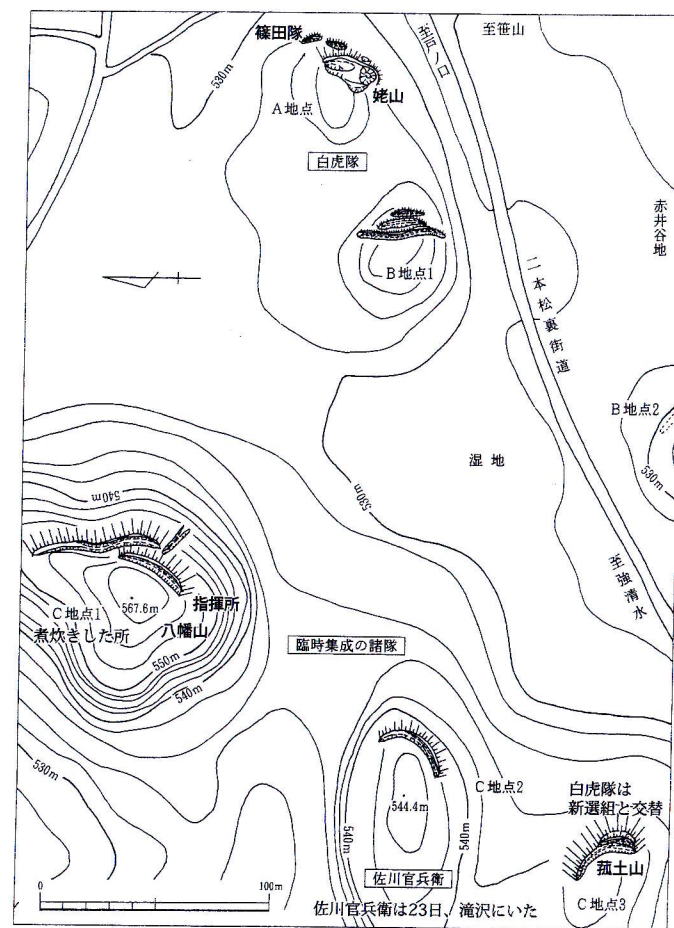


図6 戸ノ口原会津藩陣地後（中心部）石田実測

「胸壁」と呼ぶ塹壕跡は、いずれも深さは、四〇cmから八〇cm、人が腰を下ろすと丁度胸の高さになる深さに掘られ、溝の前に土塁状の高まりを持つている。これらすべての遺構の発見は、石田である。遺構の中心となる陣地跡は、孤土山の北に位置し、煮炊きをしたとされる八幡山である。約九〇

取るに過ぎず、後退して戸ノ口原に布陣するのがやっとだった。

西軍方の戦没五〇年祭にまとめられた『維新戦役実歴談』には

「十六橋は、石橋にて、幅三尺に長さ一間半くらいな石が三枚渡してある極めて危険な橋」

と書かれ、そのため

「家を壊してその柱を渡してそれを藤でからけて畳をおいた」

とあり、幅九〇cmの危険な橋で、会津藩の奇勝隊が橋を壊そうとしたが西軍の進行が早く壊せなかった。西軍の本隊が二十三日早朝四時に猪苗代を出発し、橋を渡るときには、猪苗代側の戸ノ口集落の家を壊し、畳を敷いて渡ったのであった。薩摩藩士の萩原源五郎『陣中日記』によると、薩摩藩の四・五番隊、兵農隊、三・四番隊は、二十二日十六橋を渡ったのであった。それは、「(一)母成峠の戦いと国境の陣地構築」の章であれたように、母成峠の戦いの時、西側を進んだ川村隊は戦闘に参加できず悔しがり、勇んで進んだためである。

「雨、薩先鋒、三藩続いてこれ進んで猪苗代に至る。賊、狼狽去る。当地泊。薩四五番隊兵具隊など、我が三四番隊などは進んで賊を追い、十六橋を渡り、滝沢手前隔てること会賊一里余にして野に泊す。予またこの地に至り

賊勢を巡視し、猪苗代に帰陣す」

薩摩藩が最初に十六橋を渡り、会津藩を追い、会津藩と隔てること一里余（実際は戦国時代の一里で、約六五四m）の野に宿泊したという。その跡は、会津若松市戸ノ口集落の二本松裏街道北側にある丘陵のような小高い平場となっている。さらに、先陣は土佐藩とされたことから、土佐藩は会津レクリエーション公園内に長さ五四mの塹壕を伴った陣地を構築している。その塹壕跡は、明治四十一年（一九〇八）に若松に六五連隊が進駐した時、一時軍事訓練のために再利用されている。

二十二日、白虎隊が戸ノ口原に進むと、西軍は四、五〇〇m離れて数千名居るのが認められ（実際西軍の本隊は猪苗代にあり数百名）、すでに旧幕府の衝鋒隊一五、六名がラッパを吹き戦っていたのであった。そこで側の山（レク公園のトイレ付近）に登り、身を隠して敵の様子をうかがうと、既に西軍は、胸壁を築いていたという。『戊辰戦争実証談』に

「時二官兵ハ四、五丁（実際は一km）ヲ距ツテ数千人居ルヲ認ム。是ヨリ戸ノ口原ニ達スルニ幕兵ハ、十五、六人喇叭（ラッパ）ヲ吹テ敵軍ニ向フアリ。是レニ於テ其側ノ山ニ登リ身ヲカクシテ敵状ヲ窺フ。既ニシテ胸壁ヲ築キ陣ヲナシ其上ニ於テ一戦シ、我が軍利アリ。敵退キ更ニ大砲ヲ引キ来リ戦フ。（進撃兵一・三十名馳来リ、

二十三日払暁と決しければ、戸ノ口原に宿陣する事となれり」

とあり、孤土山の陣地を離れている。それには、作戦があった。戸ノ口原の部隊は銃になれた部隊で、ここでは白虎隊の指揮命令系統が取れていたことから、指揮官（官兵衛）の許可か命令により、白虎隊を二つに分け、旧二本松街道を挟んで、北側と南側に布陣したのであった。その時、敢死隊と新選組に孤土山の陣地を交代したのであった。『島田魁日記』によると、母成峠の敗北後、

「敵兵猪苗代工責（攻）メ寄ス。於此、山口某ト共ニ二（日）橋工引揚、直ニ若松城下ニ至リ、山口公直様登前頭ノ由ヲ言上。依之、若松城下ニ残り居戦士尽ク滝沢峠ニ（日）橋ノ両道ニ向ハシム。当隊ハ天寧寺エ集リ一泊ス」

と、山口公こと斎藤一は二十二日に若松に戻り、滝沢口と日橋口（大手寺）に新選組を分けて直ちに派遣したのであった。さらに十六橋に西軍が来たことから、土方は

「敵兵、大軍ヲ以テ十六橋ヨリ滝沢峠エ押来リ、土方公滝沢峠ニ出陣ス」

と、新選組の半分の部隊は戸ノ口原に向い、土方は滝沢峠（滝沢本陣）に出陣したのであった。

会津藩、白虎隊の作戦は、二本松旧街道を北と南に分かれ、

繁シキ戦闘セリ。乃チ午後四時頃ナリ。ナオ此山続キニ於イテ、幕兵ハ十五・六人喇叭ヲ吹テ敵軍ニ向テ闘ヒツツアリ。時我敢死隊、若干名和銃或ハ槍等ヲ携ヘ進ミ来ル。（敢死隊ハ乃チ抜刀隊ト同ジ）

前日、激しい戦いがすであつた。西軍を攻撃すると、敵は一旦退くが、大砲を引いて来て攻撃してきたのであつた。会津藩の敢死隊は、町人や農民が主力のため和銃と槍で進んで戦ったのであつた。その場所は、戸ノ口集落と奮戦の地碑がある間と、会津レクリエーション公園内である。白虎隊はその後、孤土山付近に後退したのである。

（三）会津藩の迎撃作戦

会津藩では十六橋を突破されたことにより、強清水の東側、戸ノ口集落の間や笹山原で戦うことを余儀なくされたのであつた。指揮官は官兵衛で、孤土山の北、八幡山にいたが、前日の行動は詳しくわかっていない。

白虎隊は、『顛末記』によると、

「白虎隊のみ単独行動の許可を受け、他の軍隊を離れ（酒井峰治談はこの所を敢死隊に譲りとなり、原田勝吉談は若松より出張せし新選組などに譲りとなる）、十丁余も進軍したり時に、細雨少々、日暮れなんとす。明け

挟み撃ちするための布陣を敷いたのであつた。ゆえに北側の篠田小隊は会津藩本体のある強清水東の丘陵の最東側の地、姥山に単独行動の許可を得て移動し、布陣したのである。姥山には、造りかけの塹壕跡が三段残っている。山内・原田隊は、街道南側の赤井谷地湿谷植物群落西、孤土山の南に移動し、西軍を挟み撃ちにする布陣を引いたのであつた。その場所、その後の記録によると、孤土山の陣地から一五〇mしか離れていない新四郎堀であつた。（銃の射程が三〇〇mのため弾が届く距離）。

二十二日、強清水の口伝によると、前日夜、強清水郷頭の荒井家に集合が命じられ、諸隊の隊長らが作戦会議をしたという。そこで指揮官の官兵衛らと相談し、白虎隊の内記は、未明に前線に戻ろうと、白虎隊の南側に布陣した山内・原田小隊のもとへ行こうとし、笹山原方面に行ったのだが、道に迷い戻ることができなかった。さらに、『戊辰戦争見聞略記』によると、官兵衛は、決戦時の二十三日朝は戸ノ口原にはおらず、容保公のいる滝沢本陣へ行き、戸ノ口原には戻らず、滝沢峠下にとどまったのであつた。

二十三日朝『顛末記』によると、白虎隊は

「明ければ討死と覚悟し、さんさんごご団らんし、食べ物と腰から取出して食べ、寝る間もなく、東の天（空）がまさに明けなんとす」

とあり、移動して布陣し、寝ないで朝を迎えたのであった。

(四) 八月二十三日の戦闘

夜が明け切らない真つ暗な朝四時頃、西軍が行動を開始する。『若松記』によると、二十三日

「薩、長、土、大村の敵兵、猪苗代より暁四時に発軍、先鋒は土佐州、大垣の兵、すでに戸ノ口の村後、利地丘陵に拠、我が兵と数百歩を隔て、退陣す。然るところ、二十三日、黎明、先鋒土州兵より大小銃発、我が兵奇勝隊、十六橋を隔て、しきりに防戦すといえども、敵に続いて大垣敵しく発砲、我兵少し退き、戸ノ口原の地を利用して、丘陵に付き応援。十六橋に板を掛け連々進み来り。白虎隊その他隊々応援。しきりに発砲、すこぶる苦戦。敵益々増長。幾に乘し大小砲を発射する。あられの下るより激しく、我兵色めき立、かつ戦いかつ退く」とある。西軍本隊が猪苗代を出発した。前日には、すでに戸ノ口村の丘陵に土佐藩と薩摩藩、大垣藩兵の先鋒が陣取っていた。会津藩最前線の奇勝隊は、戸ノ口村の南の丘陵に後退して対峙し、夜明けを待っていたのであった。空が少し明るくなった暁、現在の五時三〇分頃、西軍本隊が十六橋に板を掛けて進攻、大小銃で激しく攻撃して来たのであった。

側、「白虎隊奮戦の地」の看板がある附近で、白虎隊より前に布陣していた敢死隊や奇勝隊などの部隊を打ち破り、二本松裏街道を若松方向にまっすぐに発射しつつ進んできたのであった。前日と二十三日朝の戦闘による戦死者墓が戸ノ口原に点在し、今では奮戦の地の看板がある東側にまとめられている。なお、当時の街道は、奮戦の地の北側を通っていた。そこで、篠田隊は、身を隠し待ち伏せしようとしたが、身を隠す所がなかったのだ。

「白虎隊士潜伏したる溝内は其の幅約五尺、六尺、前面堤防の高さ二尺の至り三尺位なるをもつて、隊士の敵弾を受けたるものは何れも胸部以上になり。即死者最も多く、屍累々と堆積し、我が砲声のぞん次減少するを覚えゆ。(略)教導篠田儀三郎は溝内隊士列の中央に座を占め。白刀を振り、左右を顧み、之が指揮を為せり」と、「幸いに水なき溝あり」姥山陣地跡東の原野に出ると北側に溝があり(現在は、ほ場整備で消滅)隠れることにした。西軍が「距離百米ばかり」に近づいた時、「撃て」と教導の篠田が命令した。西軍は、どこから撃たれたか分からず一時沈黙後、ただちに激しい銃撃が返されたのであった。天気は、小雨か霧雨で、磐梯山は見えず寒かった。

一方、篠田隊以外の南側から挟み撃ちにしようとしていた原田・山内小隊は『戊辰戦争実歴談』によると

隊長の内記は、参戦会議後、会津レクリエーション公園に布陣していた土佐藩に遭遇したとされ、隊に戻らなかったことから、篠田小隊は『頼末記』によると

「終夜語り尽くして早、八月二十三日、進撃の時刻となりける。ここに意外なるは隊長日向内記の影だに見えず。一同顧みて然たり。この時、早くも教導の一人なる篠田儀三郎、揚言すらく、吾は教導の首席なるを以つて、代わりて隊長の任務を執らんと。直ちに気を付けの号令を発し、人員点呼を行えり。その点呼終わらずや否や進めの号令を発せり。(略)全軍肅然として戸ノ口指して行進す」

と、教導の篠田が、姥山と推定される懸壕のある陣地跡を出で「進め」と号令した。すると、

「戸ノ口に達せざるに、銃声次第に間近く聞こえる。これ、いよいよ敵兵に接近せるを覚えたり。然るに戸ノ口原上一つも障壁と為すべきものなかりしが、幸いに水なき溝あり、一時の急、ことごとく其の溝内に潜伏したり。敵兵は、既に戸ノ口の味方を打ち敗り、若松街道をまっすぐに発射しつつ進み行けり。この間の距離百米ばかり」

陣地を出て少し進むと銃声が次第に間近く聞こえるようになったのである。時間は六時前である。西軍は、戸ノ口の東

「白虎隊(山内隊は)ハ、此處ヲ其、敢死隊ニ譲リ、赤井谷地ニ転シ、敵ヲ挟ミ撃タントス。敵ハ本道ノ兵ヲ尾シテ城下ニ達ス。我隊、側ヨリ敵ヲ銃撃スルモ利アラズ。退軍ノ命ニヨリ、時ニ八月二十三日、大暴風雨ヲ浸シテ、新堀ノ所ニ至リ、身ヲ潜ム。而シテ土提ノ高サ五・六尺、其上ニヨジ登リ、敵ノ来ルヲ狙ヒ、立打ヲ為セシハ独リ石田和助ナリ。時ニ伊藤俊彦ハ見エズ、戦友一同心痛シ居ル所ヘ棧俵ヲ被リ来レリ、其氣ノ勇壯ナルニ驚カザルハナシ」

現在も上強清水で使用されている赤井川から引いている用水の新四郎堀に入り、「敵ヲ銃撃スルモ利アラズ」と効き目はなかった。

街道南側にある新四郎堀から側射していたのである。堀は、前日の大暴風雨により、水に浸っていた。石田和助と伊藤俊彦がここでは奮戦したようで、この時点においては、山内小隊に属していた。

『頼末記』によると、篠田小隊は、高さ二尺から三尺ある溝に隠れて撃ち

「敵弾を受けたる者は、いずれも胸部以上であり、即死者が最多く、屍は累々と堆積し」

と、二本松裏街道北側の篠田小隊は、銃撃戦で西軍の銃撃を受け、弾は胸より上にあたり、複数の即死者もいたのであ

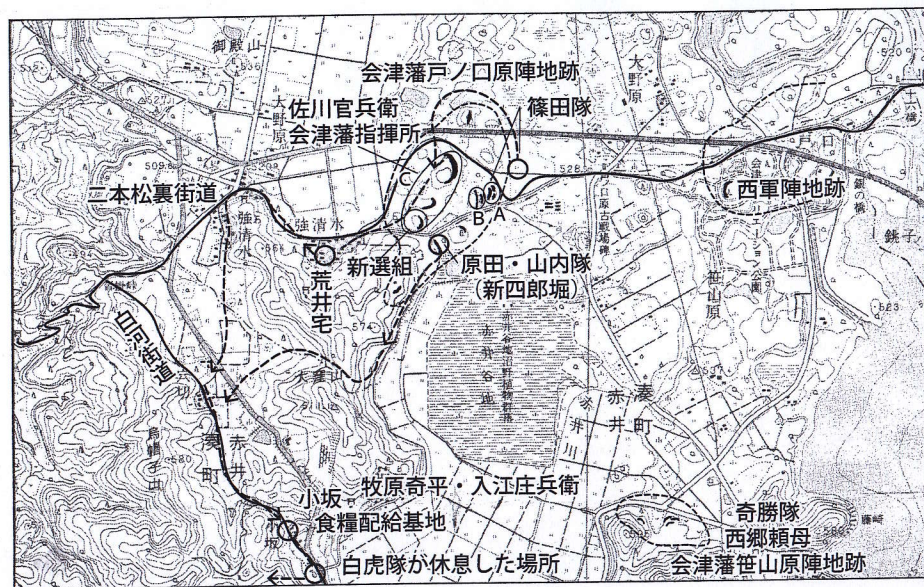


図7 白虎隊退却ルート

た。そして、北側に後退したのであった。

街道南側の山内小隊の『懷舊談』に、

「左軍（篠田隊）では、激しく戦う音が聞こえ、鉄砲の弾が、ピュッピュッと耳を掠めますので、なに糞と違って当方（原田隊）も暫く夢中になって対戦いたしてしまいましたところ、隊長の声で『引上げろ』と聞こえるのです。見ると誰も怪我をしていらんで、又味方は負けてはいらん様なので、何だか訳も分かりませんが、隊長の命令で仕方なくとうとう退却致しました」

と、退却命令がなされたのであった。

(五) 白虎隊の退却路

『原田伊織翁の直話』では

「味来（明け方のほの暗い時）七名を率いてあの溝渠にたどりて、遠く進み東方（南）より射撃した。まもなく本隊は敵に追われて自分らは、あまりに進み居たため重囲のうちに陥った。止むを得ず、迂回して原街道に出て、沓掛の坂に赴きし、所々に屍あり、坂下には多数の敵兵あり。乱射するにより再び東方に退き。赤井山の攀登る。この辺にて部下の田賀谷落伍せり」

と、原田隊は、新四郎堀に戻ると敵に追われたため迂回して

白河街道に出て少し下ったと伝えている。穴切西の丘陵から金堀の街道を見ると、沓掛峠では、所々に屍あり、坂下には多数の敵兵がいたので、東へ登り湊町赤井の小坂南にある赤井山（金山）に登ったという。この時、不明になった者がいたのである。山内小隊は『戊辰戦争実証談』によると退却路が判明している。

「朝赤井新田ヲ引キ揚ケ、江戸街道ヲ經テ穴切坂ヲ下タリ、若松ヲ指シテ西ニ向フ。其左ニ山路アリ。時ニ、山内小隊長、跡ヨリ来リ、山路ニ入り、隊士ニ謂テ曰

『子等、何処ニ赴カントスルヤト』

石山虎之助進ミ出テ大声ヲ発シテ答テ曰ク

『沓掛ニ赴テ決戦セント欲スルノミト答フ』

小隊長曰ク『敵ハ衆ニシテ我、寡ナレバ徒ニ大死ヲ為サンヨリハ我ニ従ヒ、一旦、敵ヲ避ケ、後圖ヲ為スベシト進メラル』

虎之助憤然トシテ曰ク、『勝敗レノ機ヲ見ズシテ進ム、死スル小児ノ了簡ニ過キズ、宜シク、予ガ指揮ニ従ヒテ来ルベシト云』棄テ、山路ニ向ヒテ去ラル。後、全隊モ之レニ従ハントテ、徐々歩ヲ進メシモ、小隊長ト遂ニ相失シ、路、三所ニ岐ル』

白河街道に出て、湊町穴切を南に下り、若松を目指して西の山（金山）に登った。そこで、石山虎之助が、金堀の沓掛

峠の敵を突こうというが、山内は、大死せず一旦引けといったのである。そして、赤井地区の東側の尾根道を南に進み若松を目指したのである。他の戸ノ口原にいた会津藩の部隊や頼母の部隊も同じ道を進み城下に目指した。ただし、金堀の山神社や滝沢峠頂上に会津藩戦死墓があるとおり、戸ノ口原から後退した者や若松城下から駆け付けた者がいたのであった。それは『若松記』に

「赤井小坂方出張糧兵奉行入江庄兵衛、目黒源兵衛等、また強清水出張佐川官兵衛、秋月悌次郎等、大杉ヲ經テ院内ニ至リ、院内橋を渡リ建福寺ニ兵勢ヲ集。官兵衛始五、六十人、新橋（小田橋）ヲ經テ三ノ丸ニ入城ス」と書かれてある。これは、赤井の小坂にあった食糧基地から退却しているが、官兵衛は戸ノ口原にはいなかったの、官兵衛配下の部隊である。この時、『島田魁日記』には

「敵兵、大軍ヲ以テ十六橋ヨリ滝沢峠エ押来リ、会津藩公、土方公滝沢峠ニ出陣ス。既ニシテ十六橋滝沢峠ニテ戦争始リ、互ニ大小砲打掛ケ、味方不利ニシテ追々繰引ニテ城下迄引揚ル。四ツ時、此敵兵遂ニ城下ニ迫リ発砲ス。味方シバラク籠城ス。島田魁此時、ユモトヨリ南穂谷沢へ引揚ケ、此所ニテ関門ヲ立兵ヲ集メ籠城ス。総兵凡九百余也。外ニ兵糧弾薬取扱フ女兵一千余、新選組モ一同城中ニ入、直ニ兵ヲ引テ北方面ニ向フ。米沢口塩

川二陣ス。夫ヨリ脱兵二千余塩川小田付辺二宿陣ス」とあり、新選組は、戸ノ口原や若松城下から会津美里町の穂谷沢に避難し、二十三日中に塩川へ避難していた。篠田小隊は、『顛末記』によると、退却の行動が判明している。

「勢い如何ともするあたわず、篠田は遂に退却を命ずるやがてしずかに兵をまとめて、前夜露営した場所まで退却した。それからここで人数を点呼してみると、この一戦に生き残ったものは、僅かに十六名である。(略)さきに敢死隊の居た宿へ戻り着いて見ると、それらしい人影は一人もなく、そして戦死者の屍が、そこにもここにも取り残されてある。(略)敵にじゅうりんされた一寒村の戦敗の痛ましい光景は、更に我が一隊恨みを深らしむのであった」

篠田小隊は北側に後退した後、前日いた菰土山の陣地に立ち寄るが誰もおらず、さらに上強清水集落に行ったのであった。ここでは十六名であった。敢死隊の宿となっていた家に行くと、戦死者がそのままだったという。なお、上強清水集落は、焼かれなかったものの惨劇を経験したことから、その後、家は移動して建てられている。

「引けの号令を聞くや、各隊士は溝内を出て篠田に尾して退却す。行くこと約二十丁ばかりにして、初めて敵

桑名藩兵が残した『戊辰戦争見聞略記』によると

「会ノ佐川官兵衛、直ニ援刀進テ、退兵ニ向テ曰」

「両君是ニ在テ自ラ令ヲ下サル。是ヲ叛キ公ヲ捨テ退ハ、何人ソヤ、不忠不義ナル者」

「速ニ斬ント乱兵ノ中ニ飛入ル」

「其勢ヒ雷ノ如、刀ヲ振フ電ノ如シ。兵大奮ヒ進ヒ戦フ」と、戸ノ口原で総指揮官にあたるはずであった官兵衛は、

前日二十二日夜、滝容保公と桑名の定敬公と会い、二十三日朝は戸ノ口原には行かず滝沢本陣近くの滝沢峠で下ってくる会津藩兵を見て、

「不忠不義なる者」

と、烈火のごとく怒り、会津藩士を峠に追い返そうとしたのであった。しかし、それは無駄なことで、指揮官のいない戸ノ口原の戦いは大失敗で、官兵衛の大汚点となった。

容保公と弟の定敬公は

「両公共ニ進テ令ヲ下ス。敵近ク進ミ烈発ス。公馬前ニ弾丸飛フ、雨ノ如シト雖(いえども)トモ、更ニ一步モ動ス、実ニ薄氷ヲ踏カ如シ」

と、馬で滝沢峠に進み、雨のように飛んでくる弾も気にせず、一歩も動かないで指揮をしていたのであった。

西軍の若松城下進攻が現実となった今、両藩主は「会公ハ入城セラル。我公ハ直ニ米沢城ニ赴ル、ハ何

兵の追撃を脱れたり。然れども砲声はなお遠く聞こえけり。ここに何人か供養の為建立せる見上げるばかりの大きな地蔵あり。其の周囲皆芝生にして、足を休むるに敵せり。人員点検するに僅かに十六名なり」

と、戦場から、約2km後退し、強清水を通り、南の湊町赤井の食糧基地だった小坂を目指したのであった。そこには、食糧もなかったことから少し行った金山下の地蔵前で休憩した。生存十六名を確認し、地蔵前で、おにぎりを少し持っていた者がいて石の窪みに入れ、皆で分け合って食べている。そして、若松城を目指し、赤井西側の丘陵上の尾根道に向かったのである。

金山の尾根道を他の部隊同様に若松城下を目指したものの途中分かれ道があり、そこで城下でなく飯盛山北側に下る道を進んだのであった。

『顛末記』によると、山道を下り、滝沢峠の白河街道との合流地点に行つた篠田小隊は、西軍と遭遇した。そして、合言葉と尋ねるものの返答がなく、返って銃撃されたことから戸ノ口堰に入り、飯盛山山頂を目指す、けが人がいたので飯盛山の洞門に入ったのであった。

八月二十三日、現在の十月八日、会津若松市一箕町の滝沢峠下の国指定重要文化財、国史跡の滝沢本陣では、容保公らが、敗走して滝沢峠を下る会津藩兵を見て驚いたのであった。

ノ故ソヤ。是ノ場ニ至リ、兄弟共ニ籠城シテ協力、決戦死ヲ共ニス、是義ナレハ則然ル可シ」

と、容保公は、若松城に入り籠城し、定敬公は、米沢藩へ援軍を頼みに行くことにしたのであった。本来なら、兄弟ともに籠城すべきところ、米沢藩と義理の兄弟関係だった定敬公は、米沢藩に最後の頼みとして、援軍を期待したのであった。しかし、米沢藩は、すでに会津藩を裏切り、西軍方になびき、会津との唯一の峠であった標高一一〇〇m以上ある松原峠を封鎖したのであった。

参考文献

- 〔文献一〕『赤井地区県営は場整備試掘調査報告書』石田明夫 平成十五年三月 会津若松市記養育委員会
- 〔文献二〕『会津若松市史七』石田明夫他 平成十五年三月 会津若松市
- 〔文献三〕「国境に造られた攻守の遺構」石田明夫『会津若松市史研究第九号』平成十九年十二月 会津若松市
- 『七年史』北原雅長編／桑名藩『戊辰戦争見聞略記』／『中軍護衛隊』高木盛之輔／『会津戊辰戦争』山川健次郎／『会津戊辰戦争』白石升蔵／『若松記』／『島田魁日記』島田魁／『新選組史料大全』菊地明・伊東成郎／『戊辰戦争日誌』菊地明／『白虎隊士飯沼貞吉の回生』飯沼元／図『白虎隊奮戦の図』飯沼貞雄(貞吉)が「梅里」描かせた図 飯沼家蔵

III 白虎隊の自刃

飯沼 一元

はじめに

白虎隊が有名になった理由は、飯盛山での集団自刃が悲劇の象徴とされるからである。

ここで重要なことは、自刃理由であるが、会津の観光ガイドをはじめ、白虎隊に関する著作物、映画・テレビドラマの殆どは、「城が落ちた!」という「落城誤認説」になっている。会津若松城が実際に落ちたのは、自刃の一カ月も後のことであるから、これは早合点したことになる。それは「隊長不在で子供たちだけだったので判断を誤った」というもつともらしい言い訳を付けることが多い。

辞書で白虎隊を引くと、広辞苑では

一九人の少年は城陥ると即断して城外の飯盛山で自刃した小学館の日本国語大辞典では、

戊辰戦争で飯盛山まで後退。城が火煙に包まれているのを望見して、全員自刃した
となっている。

その他の辞典も似たような表現であり、いずれも、「落城誤認説」となっている。

中には、「怪我してもう戦えないから自刃した」などという人もいる。

筆者はこれらの説に長い疑問を抱いてきた。

出陣した三七名の白虎隊士のうち一八名は帰城した。彼らは途中で炎に包まれる城下を見たはずである。帰城は一団としてではなく、数人または一人ずつバラバラだった。生還した白虎隊士酒井峰治は、一人道に迷い途中で自殺しようとしたができず、結局は城に戻っている。飯盛山に辿りついた一六名だけが全員一致して「城が落ちた!」と錯覚したとするのは不自然である。

死ぬことはそう簡単ではない。血気盛んな少年が一糸乱れずに集団自刃したのには、全員が心底納得できるだけの理由があったはずである。

『会津藩教育考』（文献一）という本の緒言にはこう記されている。

「至誠貫天」——これが会津藩の全体を貫く規範であった。会津藩教育の淵源は既に藩祖時代に発し歴代益々文武を奨励して、子弟を教育した結果、幕末にはよく力を王事に尽くし、かつ宗家のために藩国を犠牲にするを惜しまず、特に白虎隊殉国のごとき、婦人殉節のごとき、壮烈極る事績を世に残すに至り

を前提として考察する必要がある。

(一) 自刃の事

真相を知るのには生き残った飯沼貞吉だけである。彼は『白虎隊顛末略記』（以下『顛末記』と略記する）に自刃の理由を「武士の本分を明らかにする」ためとしっかり書き留めていた。『顛末記』は貞雄が残した自筆文書で、平成二十年に那須塩原市の飯沼本家で発見された（文献二）。

以下、『顛末記』を手がかりに自刃に至ったいきさつを検証してみる。

飯盛山へ登ること

暫く西、若松城を望めば、炎^{ほのお}は天に漲り、砲声は地に轟く。北、滝沢街道を看れば、敵兵の行進するその数幾許なるを知らず。南、天神口^{かみり}を顧れば、関として未だ敵兵の掠めさるものの如し。今や満目の有様^{ありさま}、かくの如し。血気の少年、ここにはじめて悄然^{しやうぜん}たり

城下は炎に包まれていた。敵に激しく攻撃されていた。加えて、飯盛山からは夥しい数の敵兵が続々と城を目指して行軍していく様子がはつきり見て取れた。

これまでは、山中の間道を抜けたり、道に迷ったりして、

会津藩の教育は儒教を基本とした。藩士の子弟は六歳になると什と呼ばれる仲間に入る。集団生活のなかで「什の掟」を守りながら遊び、一〇歳になると藩校日新館で「童子訓」を叩きこまれた。

日新館童子訓は三一条から成り、毎月一回生徒全員を集めて訓話が繰り返された。

その第二〇条には、死の美学を謳っている。

戦場にある時、勇敢に戦わない事は孝行ではない。勇敢でないという事は、君恩を忘れ、義を重んじる事無く、命を惜しむ事であり、それは未練から起こるものである。

死すべき義に当った時に死ななければ、汚名を永遠に残す事になり、人に爪弾きされてせしられ、両親までもが辱められ、生き甲斐さえも無くなってしまいうだろう

このように会津藩では、家訓・什の掟・日新館童子訓という会津武士道を形成する三本柱を通じて「危難に臨んでは節に死す臣の道なり」の精神、義の心が養われたといえる。それは男のみならず女にも伝わり、非常時の心構えとして「死への覚悟」が醸成されていった。

白虎士中二番隊の集団自刃は、このような背景があること

周囲の状況などを知ることが出来なかったが、飯盛山に登って彼らははじめて戦況の現実を知ったのである。

飯盛山は普段から、彼等の遊び場だった(文獻三)。ここから若松城までは約3km、城下を一望することが出来る。そこで、彼らが見た光景は想像を超えた惨状だった。シヨックが大きかったことは、「血気の少年、ここにはじめて悄然たり」の一文からよく理解できる。(図一)

自刃之事

ここに一同足を停めて議す。野村駒四郎、進みて曰く、今や満目の有様かくの如し。臣士の分君に尽くすは正にこの秋なり。寧ろ今行進する滝沢街道の敵軍を衝き、斃て後に止んと

野村駒四郎は剣と槍の腕前では隊士中随一である。彼がまず真つ先に言った。

「滝沢街道を行軍する敵軍に突入し、玉碎しよう」

しかし、これに異を唱えたのは井深茂太郎だった。井深は名門井深家の出で、隊士随一の英才。白虎隊出陣の建議書を起草したのも彼だ。ソニー創始者の井深大は遠戚に当たる。

井深茂太郎曰く、国に報ずるの今日、敢て寸時の命を惜に

あらざれども、曾て父母の物語に聴けり。若松城は古の英雄蒲生氏郷の築ける名城なり。一朝幾多の兵、これを攻るも容易に取るを得ずと。今や焔は天を焦がし、砲声山岳を動かすも、決して城落たるにあらず。潜に道を南に求め、若松城に入るに如すと

「国に報ずるの今日」は童子訓第二〇条を念頭においてのこと。

「若松城は古の英雄、蒲生氏郷が築いた名城なので容易に落とすことはできないと両親からも聞いている。炎上しているように見えるが、簡単に落ちるはずがない。敵に見つからぬように南下し、入城を目指すべきだ」

甲怒り、乙罵り、激論以てこれ争う

喧々諤々の議論が続いた。血気盛んな少年達が、それぞれ、帰城か玉碎かを巡って激論を交わしたのである。

篠田儀三郎曰く、最早斯くなる上は策の講ずべきなし、進撃の計、城に入る。課元より不可と云うにあらずれども、逆も十有余士の能く為し得べき所にあらず。誤って敵に擒にせられ縄目の耻辱を受ける如き事あらば、上は君に対して何の面

如シ今マ満目ノ有様斯ノ如シ血氣ノ少年等ニ
咄テ憤然タリ
自刃之事

新テ果ツヘキニアラサレハ南村折リトテ餘
ヲレテ路全ク絶エタリ多ニ一同足ヲ停メテ
議ス野村駒四郎進テ曰ク今マ満目ノ有様斯ノ
如シ臣士ノ分君ニ盡スハ正ニ此ノ秋ナリ寧ロ
今行進スル滝澤街道ノ敵軍ヲ衝キ斃テ後ニ止
ント井深茂太郎曰ク國ニ報スルノ今日敢テ寸
時ノ命ヲ惜ニアラサレハ吾等テ父母ノ物語リ

ニ聴ケリ若松城ハ古ノ英雄蒲生氏郷ノ築ケル
名城ナリ一朝幾多ノ兵之ヲ攻ルモ容易ニ取ル
ヲ得ヌト今マ焔ハ天ヲ焦シ砲聲山岳ヲ動かシ
沃ビテ城落タルニアラズ潜ニ道ヲ南ニ求メ若
松城ニ入ルニ如スト甲怒リ乙罵リ激論以テ之
ヲ争フ篠田儀三郎曰ク最早斯クナル上ハ策ヲ提
スヘキナリ進撃ノ計城ニ入ル陣元ヨリ不可ト
云ニアラサレハ逆モ十有餘士ノ能ク為シ得
ヘキ所ニアラス誤テ敵ニ擒ニセラレ縄目ノ耻
辱ヲ受ル如キ事アラバ上ハ君ニ對シテ何ノ面

図1 白虎隊頼末略記の一部(自刃のこと)

目やある、下は祖先に對し何の申訳やある。如かず、潔きよ
く茲に自刃し、武士の本分を明にするにありと

この論争に終止符を打ったのは隊長代行の篠田儀三郎だっ
た。彼はさすがに冷静だった。議論を二つに集約し、唯一恥
辱を受ける怖れのない方法を選び、日新館童子訓で叩き込ま
れた「死すべき義に当たったときに死して武士の本分を明らか
にする」で締めくくった。

貞吉は後に篠田のことを以下のように表現している。

白虎隊の教導、即ち当今の特務曹長ぐらいな資格の男に篠
田儀三郎という仁がある。この男はなかなか確かな人物であ
った(文獻三)

戸ノ口原に出陣した時に白虎隊単独行動を提言し隊長の許
可を引き出したのも彼である。リーダーとしての資質を備え
ていたであろう。

議論ここに始めて定まり、徐に用意を為し、慶応戊辰年
八月廿三日巳の刻過ぎなりき、従容として一同列座し南方鶴
ヶ城に向え遙拝訣別の意を表し、従容として皆自刃したりき

誰も何も言わなかった。議論は収まった。一同、それぞれ準備についた。

慶応四年（一八六八）八月二十三日、午前一〇時過ぎであった。

貞吉は後年、河北新報の取材に応じて以下のように語っている（文獻三）。

白虎隊に関しては、その忠勇義烈、これを近古に求めて、幾んどその比を見ざるの壮挙であることは、今更いうまでもないが、読者はこの一面を見ると同時に、又他の一面、即ちあれ等の子弟が、平生如何なる家庭に養成されたかを見るの要がある。是を知るに於て、始めて彼の義挙の偶然でないことを知るに足るのである

会津武士道を徹底的叩きこまれた彼らは、心高き思いを共有していた。

自刃は武士に許された「意思表示」の儀式である。つまり、抗議のデモンストレーションなのだ。筆者は、至誠を尽くした会津藩が朝敵とされた理不尽に対する抗議を集団自刃という形で示したものと考えている。

「朝敵の汚名」は、白虎隊士のみならず、総ての会津藩士

に共通するやり場のない憤激だった（文獻四）。だからこそ、全員が納得したのである。

飯盛山白虎隊慰霊祭は毎年公益財団法人会津弔霊義会主催で開催されている。芳賀公平弔霊義会理事長は戊辰一五〇年（平成三十年秋）の祭文の中で、「いわれなき朝敵の汚名を着せられた理不尽に対する潔白の証として白虎隊は自刃しました」と述べておられる。

「落城誤認説」は彼らを子供扱いし、「お涙頂戴物語」にして観光に利用し、一方、国家は彼らを「皇国の犠牲の鑑」として戦争に利用した。白虎隊を観光に利用するのは良いが、彼らを子供扱いすることは、侮辱である。また、彼らは特攻隊ではないし、皇国の犠牲になった訳でもない。

ネットの書き込みでは、赤穂浪士と白虎隊の自刃の比較も掲載されている。

赤穂浪士は目的を遂げ、幕府が切腹を命じそれに肅々と従う武士道でした

白虎隊士は城が落ちたという早とちり、若気の至りが原因で犬死にしかただけ

また、「怪我してもう戦えないから自刃した」という説も彼らを侮辱するものである。会津史に精通していながら、な

また、付記文の後

半を以下に示す。

尤是迄世上二石版摺等ノ物ハ多々有之候ヘ共之レハ何レモ真相ヲ得タルモノニハ無之候

白虎隊自刃の図は

多数出回っているが、中でも石版画刷りで大量発行したものに、『忠臣義士』（文獻五）がある。この白虎隊

自刃の図には槍を持ったたり、緋の着物をまとったりした白虎隊士が描かれているが、貞吉はこれらを「真相から逸脱した絵空事」と言い切つ

（二）白虎隊自刃の状況

貞吉は後年、出入りの絵師に自刃の状況を口述にて描かせ、長岡の大山登氏に贈っているが、その付記文は以下のようになっている（私家資料）。

当時ニ於ケル白虎隊殉難ノ実況ヲ、当地ノ画工ニ口授シ、之ヲ額面ニ画カシメ、別便小包ヲ以テ及御送附候間、御受領被下度候、絵画中、鮮血ノ溢出シ居ル等ハ、態ト相省キ申候、右御挨拶旁

この白虎隊自刃の図によれば、城下は炎に包まれているが、城は燃えていない。また、隊士の表情に悲痛感はなく、むしろ爽快感がうかがえる。鮮血が飛び散った様はわざと描かせなかったとしている。堂々として自刃したことを示したかったに違いない（図2）。



図2 飯沼貞雄が描かせた白虎隊自刃の図

ている(文獻三)(図三)。

白虎隊士の自刃劇

明治二十七年(一八九四)、中村謙と河井源蔵は『白虎隊事蹟』(文獻六)を発刊した。中村は、明治二十年〜二十六年までの六年間を費やして白虎隊遺族に取材したという。そのトップに「飯沼貞雄君の事蹟」(以下「事蹟」と略記する)として自刃後の足跡を詳細に掲載した。冒頭に次のように記されている。

本書の実歴は一々殉難士の父母兄弟の報道に接し、又実地の戦記は飯沼君の口述に基づき編輯したるものなり。本書石版面の現場並びに容貌着衣の模様等は旧藩士故印出の老母及び飯沼君の指示、遺族者の説話によりてせるものにして、座上の想像的に模写したるものにあらず

「事蹟」

貞吉は明治二十六年(一八九三)に東京でこの取材に応じた。「父母兄弟の報道に接し」とあるから若松の飯沼家も取材対象になったと思われる。また、「旧藩士故印出の老母」とは印出ハツのことであり、彼女こそ虫の息だった貞吉の命を救った人である。

御免」と言つて真つ先に自刃する

この原典は明治三十一年(一八九八)発行の『西郷隆盛一代記』収録第五八話(文獻七)であろう。この小説の作者は村井弦斎。これを平石弁蔵が会津戊辰戦争(文獻八)の「第四章『飯沼氏談』」としてほぼ全文を掲載した(大正六年発行)。この後、大正十三年に、当時皇太子だった後の昭和天皇が、飯盛山に行啓された御前講演に採用された。

一方、『事蹟』には下記の記載がある。

或は楠公七生の句を詠するものあり、或は張巡戦死の章を誦するものあり、或は天祥正気の歌を誦うものあり、或は項羽垓下の曲を吟ずるものあり、各父母の訓言を追懐し、或は出陣の際慈母より与えられし一首を出して再吟するものありたりと

「事蹟」

「文天祥」と「あざさ弓」は『事蹟』に出てくるから、これらは貞吉が話した史実であろう。貞吉が描かせた白虎隊自刃の図で、中央に立っているのは篠田であるが、詩を吟じているように見える。また、怪我人らしき人物も描かれている。貞吉は村井文を読んで、この時の心情と大きな違和感がないと思い、これを黙認したのであろう。以上の解釈から、この脚色場面を『平石本』を参考にして以下に記しておく。

さて、白虎隊士

はこうして、悲壮な最期を遂げたのであるが、彼等の自刃は後に脚色されて物語や映画、テレビドラマになつてゐる。その自刃劇には、次のような場面が描かれることが多い。

- ① 飯沼貞吉が母から託された「あざさ弓」の歌を朗詠する
- ② 篠田儀三郎が南宋の忠臣・文天祥の古詩を吟詠する
- ③ 傷の深かった石田和助が「お先

篠田の号令で、一同列座し、南方若松城に向つて訣別の意を表した。

そして、従容として自刃にとりかかった。

死を決すると、不思議と心が落ち着く。頬を優しく撫でる秋風が、やけに心地好く感じられた。儀式の開始を告げるかのように、篠田が文天祥の詩を吟じ始めた。

人生古より誰か死無からん
丹心を留取して汗青を照らさん

(死に際して、真心をしつかりと青竹に焼付け、後世を照らして行きたいという意味)

皆で、篠田の声に和せた。

最後の部分を吟じ終えた後、深手を負った石田和助が短刀を引き抜いた。

「傷が痛むので、お先に御免」

彼は左の下腹に短刀を突き刺すと、すぐさま真一文字に腹を掻き切った。

「石田、お見事！」

前のめりに倒れ伏す友を見て、皆が口々に叫ぶ。

「和助に遅れるな！」

叫ぶや否や、篠田が脇差を抜き放ち、力を込めて一氣に咽喉を突いた。



図3 『忠臣義士』白虎隊自刃の図

篠田はさすがに手際のよい立派な死にざまを見せた。これに続いて、次々に小刀や脇差を引き抜く音がした。

貞吉の自刃

貞吉の自刃の場面については『平石本』には次のように記されている。

友たちが次々と果てていくのを見て、「遅れてはならぬ」と思い脇差の鞘を払い、力を込めて喉に突き立てた。ブスリという音がした。切っ先が喉へ深く入ったと思った。だが、それが何かにつつかえているような気がして、切っ先が後ろに出ない。再び力を入れて押してみるが、ガチリと何かがつかえていて、喉を後ろまで貫くことができない。この上はと思いい、そばにあった岩に脇差の柄を当てると、切っ先を傷口に差し込んだ。そして、岩の両脇に生えていたツツジの根元を握りしめると、上体を突き出し全身の体重をかけて脇差を喉の奥まで押し込んだ

『平石本』

そして、ここまでは明瞭に分かっているが、その後は人事不省になったとし、その時の心理状態を次のように付け加えている。

会津藩のみの教育ではないが、武士たる者は一朝有事に際しては、主君のために生命を奉げることは忠たり孝たるの至大善事であると、幼少から学堂においてもまた家庭においても教育されて、それが心魂に徹しているから、イザという場合には自然平素の覚悟が表れて、毛頭卑怯な考えなど起こるものではない。実際自分の経験からいふても、全く死を帰するが如しであった。そして、自刃に臨んでも毅然として死を急ぎ、絶息の間際まで心神に余裕があり、またさほど痛いのでもない

『平石本』

このような自刃の心境は、現代では想像することも難しいが、少なくとも、「わざとあつさり喉を突いた」のではないことは確かであろう。

(三) 自刃者リスト

貞吉は『顛末記』に自刃者リストを下記のように記載している。

爰に於いて人員点検するに僅かに十六名なり。其の氏名、左の如し。

兵庫二男 篠田儀三郎 十七歳

雄之助弟 安達藤三郎 十七歳

守之進倅 井深茂太郎 十六歳

丈之助二男 永瀬 雄治 十六歳

忠蔵 倅 林 八十治 十六歳

半之丞弟 西川勝太郎 十七歳

卯之助弟 野村駒四郎 十七歳

勝平 弟 有賀織之助 十六歳

岩五郎弟 間瀬源七郎 十七歳

玄甫二男 鈴木 源七 十七歳

時衛二男 飯沼 貞吉 十六歳

瀬兵衛倅 津川喜代美 十六歳

軍蔵 弟 築瀬勝三郎 十七歳

克吉 弟 築瀬 武治 十六歳

巨 倅 伊藤 俊彦 十七歳

龍玄二男 石田 和助 十六歳

是ぞ飯盛山に於いて自刃したる少年なりき

貞吉は自刃者名を明示した上で、飯盛山で自刃したのは、

「自分を含めて一六名である」と何度も語っている(文獻三、六)。その経緯を要約すると以下になる。

貞吉は自刃後救出され、喜多方の不動堂に約一カ月隠棲して傷を癒した。

氏は家僕藤太に伴われ、城中に入る

『事蹟』

その後、会津藩士が収容されていた猪苗代謹慎所(猪苗代城)に出頭した。

氏(貞吉のこと)の父また城中に在りて、共に再会の胸襟を語る

『事蹟』

貞吉はそこで父時衛一正と再会した。

氏(貞吉)父子が謹慎中、家蔵(父のこと)の隊に頗る面を善くするものがあつた。

その者の望みに任せて、氏は飯盛山に於ける白虎隊自刃の時の光景を語りて聞かせる。この実話に基づいて、その者が唐紙の全面に描いたものが、即ちそれ(白虎隊自刃の図)なのである(文獻三)

そして、穂積朝春に自刃の状況を語った。

なお、貞吉の父一正は当時青龍隊の隊長でその配下に、一瀬勘助という人物がいた。

勘助は会津では高名な絵師に付いて学んだ絵の達人だった。



図4 穂積朝春の描いた白虎隊自刃の図

絵師名は穂積朝春という。

貞吉は飯盛山で自刃したのは、自分を含めて一六名と証言したので、穂積は生還した貞吉を除いた一五名を描いたのである。時は明治二年（一八六九）春で、これが、白虎隊自刃の図の嚆矢となったことで有名である（文献九）。

そして、この時の証言が新聞記者に伝わり、明治二年四月にテリカラフとして発刊されるのである（文献一〇）。

貞吉の一六名証言は一貫しており、ブレは全くない。一方で、いまだに自刃六名説を唱える人があるが、根拠に乏しく、間違いと言わざるを得ない。

なお、飯盛山には一九名の墓があり、貞吉証言とは四名違っている、これについては、次章の「白虎隊の顕彰」で触れる。

IV 白虎隊の顕彰

飯沼一元

はじめに

飯盛山で集団自刃した白虎隊については、その後いろいろな形でメディアに取り上げられ、墓碑の整備や慰霊祭に繋がっていく。しかし、一命をとりとめた飯沼貞吉は会津を離れ寡黙を通したため、真相が伝わらず憶測が憶測を呼ぶ結果となった。本節では自刃後の白虎隊がどのように扱われていったかを、時系列的に整理して、その変遷を辿ってみることにする。

(一) 自刃白虎隊士の遺体処理

飯盛山で自刃した白虎隊士の屍体処理については、滝沢村の庄屋吉田伊惣治が見かねて四体を妙国寺に葬ったところ、西軍の耳に入り軍務局に四日間留置され、今後許可なくこんなことをすると断首すると言われた。その後、明治元年（一八六八）十月二十七日になって、旧会津藩士町野主水（朱雀士中四番隊長で戦後地元取締補助者となった）が陳情を重ね、ようやく黙許され一六名を自費で妙国寺に埋葬した

参考文献

- 〔文献一〕「會津藩教育考」 小川涉 昭和六年 マツノ書店（平成十九年復刻）
- 〔文献二〕「白虎隊の戦闘行動と自刃の決定プロセス」 飯沼一元、平成二十二年三月二日 会津人群像No.一六 歴史春秋出版（株）
- 〔文献三〕「飯沼貞雄談による白虎隊実歴談」 河北新報社 明治四十三年六月二十七日～七月三日
- 〔文献四〕「ある明治人の記録」 石光真人 昭和四十六年五月二十五日 中央公論新社
- 〔文献五〕「初期白虎隊自刃図について」 川延安直 平成二十年三月三十日 福島県立博物館紀要第二二号
- 〔文献六〕「白虎隊事蹟」 中村謙 明治二十七年 河井源蔵編 国会図書館
- 〔文献七〕「西郷隆盛一代記 第二四二～二四五」 村井弦斎 福良竹亭 明治三十二年 報知社
- 〔文献八〕「會津戊辰戦争」 平石弁蔵 丸八商店出版部 大正六年（昭和四年増補版）
- 〔文献九〕「白虎隊士飯沼貞吉の回生」 飯沼一元著 平成二十五年ブイツーンリユニーション
- 〔文献一〇〕「心情新話」 明治二年四月二十八日 天理可樂怖第三号 官許新聞
- 〔文献一一〕「白虎隊の真実」 井上昌威 平成二十六年八月一日 会津人群像No.二七

との記録がある（文献一）。

この陳情の過程で、軍務局からは「江戸に問い合わせるから返事を待て」と言われたが、「それでは十五日もかかり山犬や鳥の餌食になってしまふ」と言って懇願したという。白虎隊自刃から約二カ月後、十月二十七日は新暦で十二月十日で雪がちらついていたことだろう。

丁度この時期（明治元年十月七日から十五日）に、民生局（新政府）が会津藩士四名に命じて、合計五六七体の屍体を経費七十四両で埋葬させている（文献二）。

薩長等西軍の戦死者の墓はこの十月に建てられ、西軍墓地に安置されている。

戦争が終わったら、一刻も早く帰藩したいのが人情。しかし、戦友の遺体を放置したまま帰藩できないのも人情。民生局の意図は新政府軍の遺体を早期に回収し埋葬し、会津藩士の屍体と明確に区別することだったと思われる。

会津藩の戦死者は約三〇〇〇名といわれるが、その遺体処理は翌年二月以降である。これと比較すると、自刃白虎隊士の遺体処理は特別扱いだったといえよう。

(二) テリカラフ

日本初の新聞『テリカラフ』（天理可樂怖）の明治二年（一



図1 三戸町にある日本最古の白虎隊墓碑

八六九) 四月二十八日発行の第三号にて、「心情新話」と題して白虎隊の自刃が初めて報道された。

貞吉は自刃後、武器役人の妻印出ハツに救出され、喜多方の不動堂で傷を癒したのち明治元年十月八日頃に猪苗代城謹慎所に出頭した。ここで、帰城した白虎隊の戦友遠山、藤沢庄田、酒井と再会し、飯盛山で集団自刃したことを告げた(文献三)。この話が新聞記者に伝わり、活字化されたのである。以下、現代文にして記事の一部だけ抜書きする。

ここにお話しあり。一人の老嫗あり。息子の行方を尋ねて山に登って行けば、……中略……死体が一面に広がり、血の海たる惨状を見た。何れも幼弱にて年頃は息子に近かったので、一人ずつ確かめると、そのうちの一人が刃を喉に刺しはさみ、息がまだ残っているようなので、刃を抜き、背負って山を下り、しばらく手当てをしたところ、その人遂に蘇生した。そのいきさつを尋ねたところ、はじめ滝沢近くの山間にて敵と遭遇し、戦ったが敗走したそう。若松城方面を見ると、敵は既に城際に迫っており、一同覚悟を決め遙拝して自刃した。自分も喉を突いたがその後は人事不詳となり、助けて連れ帰られたことなどは、全く覚えていないという。全部で十六人、何れも白虎隊士でことごとく死に就き、一人蘇生せるによって、外十五人の姓名も明らかになったという。

歳で戦死した。

当時は会津藩士の墓を造ることは禁止されていたから、この墓碑の建立を思い立った人物は余ほどの必要性和覚悟があったはずである。このような回りくどい表現をしたのは、露見して会津藩にお咎めが及ぶことを避ける為の隠蔽工作であろう。

秀蔵は白虎隊長日向内記の甥に当り、城下の住まいも直ぐ近くである。

この碑の建立を企画し、実行したのは内記と考えられる(文献四)。

このような若者が執った心の潔さを見ると、大人になれば英材となるべき人も沢山あったと思われ、真に惜しいことをしたと人々は語り伝えている

自刃者は一六名、内一名蘇生し、残る一五名の姓名が明らかになった。

(三) 日本最初の白虎隊碑

青森県三戸町の観福寺に日本最初の白虎隊墓碑がある。建立は明治四年(一八七二)。

墓碑には

「忠烈古今稀なる白虎隊の英魂を弔わん」

明治四年未正月拾参日

「諏訪伊助の娘嫁而為大竹親君妻哉」

と記して、白虎隊士一七名の氏名が刻んであるが、その中に飯沼貞吉の名前もある。

「大竹親君」は大竹秀蔵の父新十郎、「妻諏訪伊助の娘」は母シオを指している。

一月十三日はシオの一周忌である。秀蔵は会津藩大竹家四五〇石の三男で、秀蔵の兄・大竹主計は戊辰時、仁義隊頭として戦い、九月に四六歳で戦死、その弟梶之助も八月に四一

彼は白虎隊士を死なせた責任を人一倍深刻に感じていたはずである。この時期は謹慎解除から間もなく、斗南移住も緒に付いたばかりである。自刃者リストがあるわけではなく、一七名の白虎隊士名を列挙できた人物。それは隊長の内記を措いて他にはいない。内記は籠城戦で合同白虎隊の隊長を務めた。出陣した三七名の隊士の中で城に戻って来なかった者の名前を脳裏に刻み込んだはずである。そして、その中には帰城できなかった貞吉も含まれていた。

「忠烈古今稀なる白虎隊の英魂を弔わん」とは彼の真の告白であろう。

なお、貞吉リストとの違いは津川喜代美と林八十治が脱落し、石山虎之助、池上新太郎、伊藤(東)悌次朗が記載されている。なお、飯盛山一九士の墓は、これに津川、林、津田捨蔵を追加し、貞吉を除外することになる(図二)。

(四) 飯盛山の白虎隊碑

初期の白虎隊碑

会津藩士は斗南移封となったので、戦後四年間の会津若松は武士が不在となり、代わりに町人が払い下げとなった土地を購入し移り住んだ。明治四年の廃藩置県を機に斗南の扱いは「勝手次第」となり、旧会津藩士が会津に戻り始めた。飯

沼家が斗南から帰郷したのは明治六年（一八七三）である。明治七年（一八七四）に戦友仲間の信友会の人たちにより、妙国寺の遺骸を飯盛山に移し墓標が建てられた。飯盛山は別名弁天山と呼ばれ、昔名の時代から歴代領主の崇敬を受け、人々の参詣遊山の地であり、白虎隊士の墓所には参拝が絶えず続けられていた（文献五）。

明治十七年（一八八四）には一七回忌を期して墓石が建立され、会津藩主松平容保公のご臨席を仰ぎ、初めて法要が執り行われた。碑は合葬の質素なもので墓域も狭く、現在の一九士の墓とは雲泥の差がある。

これに先立つて寄合白虎隊士中条広記辰頼（当時三〇歳）が日新館の再校に立ち上がった。貞吉の妹ひろ（比呂子）が嫁した飯河小膳もこれに協力した。中条が漢学者佐原盛純を教授に招聘して「漢詩白虎隊二十行詩」ができ、剣舞を奉納したのはこの時である。

剣舞の稽古は自刃した池上の父池上与兵衛が神官を勤める住吉神社で実施したという。残念なことに、中条は法要一週間後に没し、飯河小膳も同年の秋にこの世を去った（文献六）。明治二十一年（一八八八）七月十五日、会津磐梯山が大規模な噴火を起こした。裏磐梯に景勝地として名高い五色沼が形成されることになったのはこの噴火による。

翌年、墳火で約五〇〇名もの死傷者を出した会津では、そ

の復興のために、会津地方五郡大同団結集会在七日町の清水屋で開催された。この時期に会津に戻った西郷頼母は、明治二十二年（一八八九）四月二十四日には戊辰戦争戦没者招魂祭の祭主を務め、五月には士族会が設立され仮会長に就任した。戊辰二三回忌に向けて十月には白虎隊建碑の趣意書が頒布され、募金が開始された。

白虎隊十九士の墓

明治二十三年（一八九〇）、戊辰二三回忌に合葬墓は銘々碑にあらためられた。銘々碑は一九あり、右からイロハ順に並んでいる。一九士を特定するために、白虎隊士の遺族への聞き取りなどが盛んに行われた。『白虎隊事蹟』（文献七）もその一つである。飯盛山で自刃した白虎隊士が「一九士」と認識されるようになったのは、この時からである。

それ以前は貞吉証言による一六名だったが、出陣した三七名のうち生還が確認されたのは一八名であるから、死亡した一九名のうち貞吉リストに無い四名について吟味された。

まず、石山は遅れて飯盛山に辿り着き自刃したとされた。酒井峰治の手記には以下の記載がある。

二十三日の朝、赤井新田を引き揚げ、江戸街道を経て穴切坂を下り、若松を指して西へ向かう。その左に山路があった。

この文から戸ノ口原での戦場で複数の戦死者が出たことが分かる。また、貞吉が残した「白虎隊奮戦の図」をよく見ると、一六名が描かれているが、うち、三名は被弾したように描かれている。

また、「松平容保書」と題された「忠臣義士」には、貞吉リストに石山を加えた一六名の他に、左側に下記の追記がある。

「飯沼貞吉 十六歳 自刃セシモ蘇生今日存在」

「池上新太郎 十六歳 同人は右十六名と同所にて戦死セシ 以つて茲に姓名を掲げ忠節を表す」

忠臣義士は明治十六年（一八八三）に約一五〇〇部印刷発行されているので、この時点で「池上新太郎戦死」の情報は関係者の間で共有されていたと思われる。

貞吉は明治四十三年（一九一〇）に河北新報の取材に応じて以下のように語っている（文献九）。

一緒に自刃したのは、十六名であつたのだが、その後有志者が記念碑を建てる際に、当時山麓に戦死して居た他の三名を加えて、これを十九名としたのだそう

その時、山内小隊長が後から来て、山路に入り、隊士に「お前達、何処へ行くこうとしているのだ？」と訊いた。石山虎之助が進み出て、大声を発し、「沓掛に赴いて決戦するつもりです」と答えた。小隊長は、「敵は大軍にて我らは少勢、いたずらに犬死にするよりは我に従い、一旦敵を避けて再起を図ろう」と勧められた。虎之助は憤然として、「小隊長はよもや腰を抜かされたのですか？」と言った。小隊長もまた憤然として、「勝敗を見極めずして進んで死のうとするのは、子供の了見に過ぎぬ。我が指揮に従い、ついて来るべし」と言い捨て、山路に向かって去られた

「遅れて飯盛山に辿りつき仲間が自刃したのを見て、自分も自刃した」との明確な根拠は不明であるが、前述の文からはありうる話と思われる。

さらに池上、伊東、津田の三名も加えられた。貞吉が残した「白虎隊の人員」（文献八）には以下の記述がある。

白虎隊士の潜伏したる溝内は其の幅約五、六尺、前面堤防の高さ約二尺乃至三尺位なるを以て、隊士の敵弾を受けたるものは何れも胸部以上に在り、即死者最も多く、尸屍累々堆積し、我が砲声の漸次減少するを覚ゆ。中には重傷を負い、戦友を呼び介錯を請うものあれも、相顧るの暇なかりき

従って残る二名についても戦死し、戸ノ口原に埋葬されているかもしれないが、DNA鑑定しない限り確証にはならない。

たとえ戸ノ口原で戦死したとしても、彼らもまた臣節を全うしたのである。

貞吉は「一緒に自刃したのは自分を含めて一六名だった」と証言したのであり、飯盛山墓碑が一九名になったことに何の異議も唱えていない。

飯盛山白虎隊墓域の拡張

山川健次郎の活躍

大正十四年頃から、参拝客が増え手狭になった飯盛山白虎隊墓地の拡張が検討開始された。これを主導したのは山川健次郎である。健次郎は貞吉の従兄弟で、当初は白虎隊に入隊できなかったが、白虎隊自刃後急遽編成された幼年組合同白虎隊に編入された。

健次郎は大正九年に二度目の東京帝国大学総長を退任し、郷土会津に献身するようになった。大正十三年に皇太子殿下（後の昭和天皇）が飯盛山を行啓した際、案内役を務めたこと、この頃イタリアのムッソリーニ首相が記念碑寄贈の意向を示したこともある。

んがため、古代ローマの権威を現す「ファシスタ」党章の鉞を飾り、永遠偉大の證たる千年の古石柱を贈る

碑文背面

武士道の精華に捧ぐ ローマ元老院及び市民より

となっていたが、昭和二十年終戦後米進駐軍の意向により碑文は切削された。

なお、この年は一月に、秩父宮仁親王殿下と容保公四男恒雄男爵長女勢津子姫のご婚約が成立、九月二十八日にはめでたくご成婚の儀が挙行されたばかりであった。

いわれなき賊軍の汚名に苦しんでいた会津人にとっては、これほどの歓びはなかったであろう。これにイタリアからの記念碑寄贈という国際的な慶事が重なったのである。

除幕式では、高松宮殿下、近衛文麿公、イタリア大使ら、錚々たる方々からのご挨拶があった（文献五（四二））。

(五) 下関功山寺万骨塔の白虎隊霊石

長府は、毛利藩の支藩である長府毛利五万石の城下町である。功山寺にある万骨塔は、桂弥一が吉田松陰の意思の具現として、長門尊攘堂（現長府博物館）とともに建てたもので、東西を問わず全国各県から代表的「志士」霊石の寄進を集めたものである。吉田松陰、高杉晋作、木戸孝允、大久保利通、

当時の若松市長松江豊寿や東武鉄道社長根津嘉一郎らの協力を引き出すと共に、山主飯盛家から墓域倍增の寄進を得て熱心に推進した。なお、松江は朱雀隊士の子孫であるが、第一次世界大戦後徳島の坂東俘虜収容所の所長に就任し、ドイツ軍捕虜に可能な限り自主活動を認めるなど人道的に扱った。彼ら俘虜が日本で初めてベーターベン^{ベーターベン}の第九を演奏したことは特に有名である。

ローマ記念碑

健次郎の外交

努力が実って、

昭和三年十二月

にローマ宮殿の

大理石古石柱を

使った記念碑が

飯盛山に奉納さ

れ序幕された。

碑文正面

文明の母たる

ローマは白虎

隊勇士の遺烈

に敬意を捧げ



図2 飯盛山にある白虎隊19士の墓（明治23年）

西郷隆盛、坂本龍馬、福沢諭吉、渋沢栄一ら錚々たる人の霊石が並んでいる。

この万骨塔に白虎隊士霊石が安置されている。霊石は昭和八年に福島県教育会から寄進されたもので、一九名の自刃白虎隊士名と年齢が刻まれている。飯盛山一九士と比較すると、津田が欠落し貞吉が入っている。

なお、白虎隊の会では平成二十三年に山川健次郎霊石を寄進し、白虎隊霊石のすぐ上に安置された（文献二（四三））。



図3 万骨塔の白虎隊霊石と山川健次郎霊石

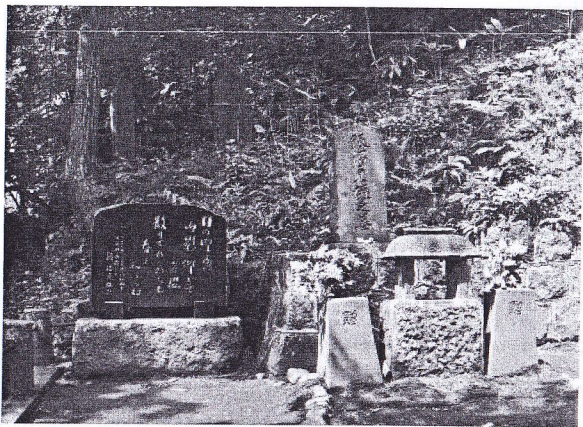


図5 飯盛山にある飯沼貞雄の墓（昭和32年）と日の御子の歌碑（昭和63年）

虎隊の歌に合わせた剣舞も広く見かけられる。大人の舞だけでなく、小学校、幼稚園でも演じられ、女白虎隊にまで広がっている。

(七) 飯沼貞吉（貞雄）の墓

昭和三十二年九月二十二日から三日間にわたって、会津飯

盛山で明治戊辰戦役九〇年祭が催された。かつての西軍関係各県にも案内状が送られ、山口県からは知事を含め数人が参加し、白虎隊墓所にも参拝した。

飯盛山に貞雄の墓碑が建てられたのは

(六) 会津弔霊義会と白虎隊の慰霊
会津弔霊義会は大正二年九月に設立され、四年後に財団法人の認可を受け、以来、阿弥陀寺、長命寺および飯盛山白虎隊墳墓における旧会津藩士戦死者の祭典を行っている。設立初期に発起人を務めたのは旧会津藩士町野主水である。法人の目的は以下のようになっている。
戊辰の役における旧会津藩戦死者の霊を祭祀するとともに、旧会津藩士の果たした歴史的役割および精神的遺産を顕彰し、後世に継承することを目的とする
飯盛山では、毎年四月二十四日と九月二十四日に弔霊義会の主催で白虎隊墓前祭が開催され、式典の最後に白虎隊剣舞が奉納されている。多くの観光客が集まるが剣舞奉納は慰霊であって見世物ではないとされる。

白虎隊剣舞

白虎隊剣舞の始まりは明治十七年の私学日新館の生徒による奉納であるが、その後明治二十三年に会津中学校が設立され、教授も生徒もこれに転入し、剣舞も継承された。なお、会津中の設立に奔走したのは、旧会津藩家老山川浩である。山川は明治十九年（一八八六）に高等師範学校の校長に任じられ、明治二十三年九月に貴族院議員となった。その後、明



図4 飯盛山白虎隊慰霊祭で奉納される白虎隊剣舞

治・大正・昭和と継承され、昭和二十年の終戦で一時期中止となったが、昭和二十八年から会津高等学校に引き継がれ、現在に至っている（図四）。

白虎隊剣舞は、佐原の漢詩の他に「戦雲暗く」で始まる白

この時である。建立したのは前島会（郵便の父といわれた前島密の精神を伝承する会）で、墓地は飯盛山主の飯盛氏が提供した。揮毫は容保公孫の松平勇雄氏（参議院議員、福島県知事）で、貞雄の次男・飯沼一精と妻弘子は貞雄の遺言どおり、遺髪と義齒をここに納め、貞雄が掘った仙台市の自宅の井戸から水を汲んで持参し、墓にかけた。墓の隣に建てられた記念碑には以下の碑文が彫られている。

飯沼貞雄君は、（中略）明治戊辰の役白虎隊は全員飯盛山に自刃し 君もまたその一員であった。偶々一藩士の妻が微かに体温を存する君を発見百方介抱遂に蘇生せしめたまことに天の摂理という外なき奇しき運命であった
しかし 君が終生胸底深くおさめて忘れ得なかつたのが往年の朋友への思慕であった
今年白虎隊士九十年祭にあたり郷里会津と通信関係の有志によりゆかりの山に君の墓碑を建てられた
君と十九人の同士は泉下に手を執り合い満足的笑みを交わしていることであらう。

昭和三十二年九月二十四日

（財）前島会仙台支部寄進

貞吉没後間もなく、『会津日報』（昭和六年）に貞吉墓の飯



図6 白虎隊自刃の地に設置された自刃理由の説明版について報じた新聞（2011年9月）

盛山合祀反対の記事が掲載されてから二六年、貞雄は自刃した白虎隊士の一員として正式に認められたのである。

これより先、大正十三年八月に、皇太子殿下（後の昭和天皇）が飯盛山に行啓された。健次郎は会津を代表する一人として、ご一行のお側近くでお供をしていたが、貞吉にその時の様子を伝えた手紙が残っている（文献未定）。

時にますますご清栄のこととお慶び申し上げます。さて、戊辰の年、貞吉君が白虎隊士として出陣した折、叔母上様が贈りになった歌を、先頃、両殿下が飯盛山へ行啓なされた際に、大尉某が口にしたのですが、（両殿下は）実際に（その歌を）お詠みになり、「（貞吉に）贈ることになったとは」と涙され、この歌のことを記憶になっていたそうです。

飯沼様

大正十三年八月二十七日 健次郎

これを受けて貞吉は早速その感激を歌に詠んで、健次郎に送った。このあと、健次郎と何度かのやり取りをするなかで推敲し、完成したのが「日御子」の歌だった。

日の御子の 御影あおぎて 若松

散りての後も 春を知るらん（孤舟）

日の御子は皇太子殿下、若松は、飯盛山で自刃した白虎隊の戦友たちのことである。泉下の戦友たちとこの喜びを分かち合いたいという切ない気持ちが伝わってくる。

貞雄の墓に隣接して、「日の御子」の歌碑が昭和六十二年（戊辰一二〇年）に建てられた。これを企画実行したのは、本郷町の主婦千代春枝さんで費用（二〇〇万円）を用立てて実現した。

春枝さんは、「私の墓は知らないが、日の御子の歌碑を貞雄の墓の傍に建てて欲しい」と当時本郷町長だった滝沢幸助氏に懇願したという。

飯盛山を訪れ、正面に並んでいる白虎隊一九士の墓をお参りする人の殆どは、白虎隊悲劇物語を想起すると思われる。次に、正面右手の小道を進むと、「飯沼貞吉の墓」が現れ蘇生者が一人あったことを知る。

更に奥に進むと階段があつて、これを下ると「白虎隊殉難士各霊塔」がある白虎隊自刃の地に出る。そして、若松城を望む「少年隊士像」を見て、炎上する城下を見て自刃したという通説に納得し、若松城がどこかを確かめて帰路に就く。

籠城戦がその後一カ月も続いたことや、白虎隊士が自刃した本当の理由については「落城誤認説」が常識になっているので特に関心を示さない。

そこで、白虎隊自刃のいきさつを解説する説明版を飯盛山

白虎隊自刃の地に設置した。

平成二十三年九月に会津若松市長をはじめ関係者のご臨席のもとに除幕した。

説明版は縦五五cm×横九三cmで、文面は次の通りである。

慶応四年（一八六八）八月二十三日（新暦十月八日）、年齢が十六〜十七歳で構成された土中二番隊の白虎隊士は猪苗代から十六橋を越えて進撃した西軍と戸の口原で交戦するも、敵の軍勢力に圧倒されて退き、戸の口洞門をくぐってこの地に至った。

炎上する城下を前に、玉砕か帰城かを巡って、激論を戦わした。敵陣突入を提案する者もいれば、鶴ヶ城が簡単に落城するはずはないとして帰城を主張する者もいた。

しかし、最終的に「誤って敵に捕らえられ屈辱を受けるような事があれば、主君に對して大変申訳なく、祖先に對しても申訳ない。この場合は潔きよく自刃し、武士の本分を明らかにするべき」との決断にはじめて、全員が同意し、一同列座し南鶴ヶ城に向って訣別の意を表し、全員が自刃した。

（飯沼貞雄書白虎隊顛末記参考）

後、一名が蘇生。その名は飯沼貞吉である。

なお、鶴ヶ城開城はその一カ月後であった。

平成二十三年（二〇一一）九月二十三日

白虎隊の会

平成二十九年九月 西川勝太郎生家跡 … 城前一七
 地権者…市立第二中学
 記念碑の設置には様々な制約があり、碑の拡大には限界が



図8 泣血戦説明板の隣に設置された自刃白虎隊士生家案内図（西郷頼母邸の向い）

説明板は自刃の地の一番奥にあり、立ち寄る人が多いとはいえない。しかし、これを見て「白虎隊の真相が分かりました」というネット記事も見かけるようになった。

(ハ) 自刃白虎隊士生家案内図と生家跡碑

京都には幕末志士ゆかりの地に記念碑などが設置されている。会津若松市にはこのような記念碑は無いが、歴史の街の訪問客にとってはあれば便利であろう。白虎隊の会では自刃白虎隊士の生家跡に記念碑と説明版を設置している。

これまでに設置した記念碑は以下の七基である。

- 白虎隊士生家跡記念碑（設立年、白虎隊士名、住所、地権者）
- 平成二十七年九月 篠田儀三郎生家跡 … 米代一四一三〇
- 地権者…秋山建設（株）
- 平成二十七年九月 飯沼貞吉生家跡 … 西栄町一八二
- 地権者…（有）きくや生花店
- 平成二十八年九月 井深茂太郎生家跡 … 城前三二二東邦寮
- 地権者…東邦銀行（株）
- 平成二十八年九月 津川喜代美生家跡 … 米代一三三二
- 地権者…福島県立若松商業高等学校
- 平成二十九年九月 石山虎之助生家跡 … 西栄町四六一

地権者…県立葵高等学校
 平成二十九年九月 安達藤三郎生家跡 … 山鹿町三二七
 地権者…竹田総合病院

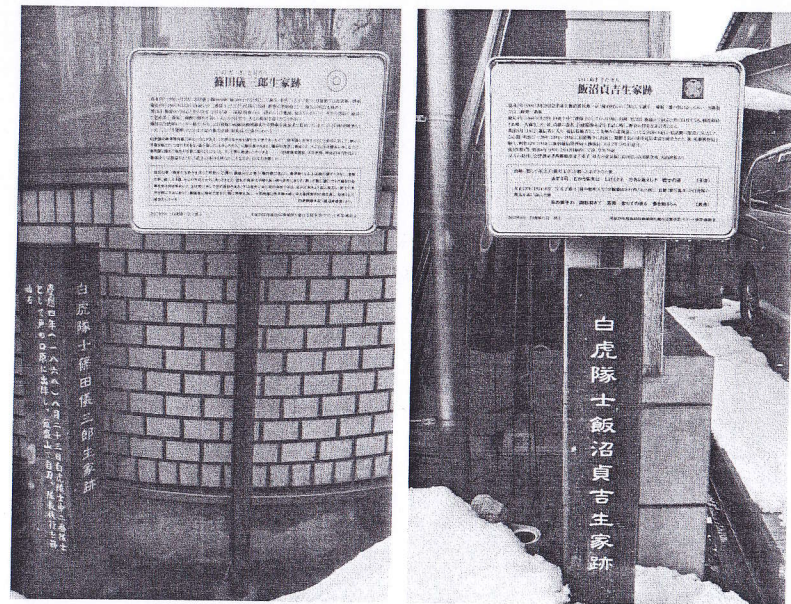


図7 自刃白虎隊士生家跡碑と説明板（左：篠田儀三郎、右：飯沼貞吉 2016年9月）

ある。
 そこで、自刃者全員の生家案内図を西郷頼母邸向いの設置した。

(九) メディアが取り上げた白虎隊

教科書

日露戦争では一〇万名を超す戦死者が出た。急遽、兵士を募集し日本軍の士気を高め、挙国一致の戦時体制を構築する必要があった。死を恐れない殉国精神を植え付けるために政府が目をつけたのは、白虎隊だった。明治三十七年（一九〇四）、白虎隊は国史教科書にも取り入れられ、翌年には白虎隊の歌が文部省唱歌として制定され、全国であまねく教育された。

一番 霞の如く乱れくる 敵の弾丸引き受けて

命を塵とたたかいし 三十七の勇少年

これぞ会津の落城（*）に その名聞えし 白虎隊

残るは僅かに二十人 一度後に立ちかえり

主君の最後に会わばやと 飯盛山によじ登り

見れば早くも城落ちて（*） 焔は天を焦がしたり

（*）この時点で未だ城は落ちていない。開城はこの一カ月後である。筆者は落城誤認説が定説化された原因は、この文

部省唱歌にあると考えている。

なお、若松教育部会が国定国史教科書に一六名と記載してあるのを二〇名に修正するように文部省に陳情し、認められたとの陳情報告が残っている（文献一〇）。

また、終戦前の昭和十八年版の国定国史教科書には江戸城無血開城の次に、白虎隊に関して次の説明がある。

会津の白虎隊と名付ける小年の一団が、はなばなしく戦って、次々に討死にし、わずかに残った一九人が、飯盛山にのぼり、はるかに城を望みながらたがい刺しちがえて、けなげな最期をとげたのはこの時のことです

「次々に討死にし、たがいに刺し違えた」という表現には誇張がある。

白虎隊の歌

「戦雲暗く 陽は落ちて」で始まる白虎隊の歌は昭和十二年にデビューした。作詞は嶋田馨也、作曲が古賀政男で、古賀は会津若松市の生まれ。小さい頃から白虎隊の話聞かされてきただろう。歌唱は、霧島昇、藤山一郎、美空ひばり、他、島津亜矢らが歌っている。この歌は詩吟が聴かせどころである。

高倉一郎（歌舞伎の市川門三郎門下）・小堀彰（小堀明男の長男）もデビューした。

白虎隊士として登場する人物はすべてフィクションであるが、白虎隊の自刃という史実を背景にして、「美しい郷土を守るために未来ある一生を、恋を賭して花と散った会津白虎隊たちのあわくはかない哀歓と悲壮美を描かんとする青春時代劇」となっている。

歌舞伎

明治四十一年（一九〇八）明治座初演、大正五年歌舞伎座再演、以来三度目の上演がこの袴歌舞伎だそうである。という書き出しで以下の文がネットに記載されている。

平成二十四年八月十一日 趣向の華二日目の部（日本橋劇場）

「袴歌舞伎 白虎隊」

とにかく泣かされたわ。袴歌舞伎でこんなに泣くなんて。だって、今までは笑いが主だったんだもの。それに、衣裳をつけない、若手のまだまだ未熟なところもある演技だとしても、これほど心に迫るものをぶつけてくるとは!! あちこちからすすり泣きが聞こえてくる。

内容は大映映画と同様で、花と散った会津白虎隊士たちのあわくはかない恋物語となっている。

南鶴ヶ城を望めば 砲煙あがる

痛哭涙をのんで 且つ彷徨す

宗社亡びぬ 我が事おわる

十有九士 腹を屠って斃る

「十有九士」は古くは、「十有六士」となっていた。ここにも、一六から一九の見直しが反映されている。

「宗社亡びぬ」は佐原の白虎隊漢詩では「社稷亡びぬ」となっており、社稷という歌い方もある。いずれも古代中国で国家の守り神に使われた靈廟が語源で、転じて「国家」を意味するようになった。「社稷亡びぬ」を「城が落ちた」と解釈する人があるが、ここでは、「会津は亡んだ」という意味であろう。

映画

大映映画「花の白虎隊」が封切られたのは昭和二十九年八月である。

関西歌舞伎で人気の市川雷蔵の映画デビュー第一作。宣伝パンフレットには、時代劇を本領とする大映京都では、歌舞伎その他の芸能界から有望な新人を物色し『花の白虎隊』で次の人々を銀幕に送ることとしたとある。

この映画で雷蔵他、花柳武始（新派の花柳章太郎次男）・小町瑠美子（OSK出身）・勝新太郎（長唄の杵屋勝東治次男）

テレビドラマ

日本テレビの年末時代劇スペシャルで「白虎隊」が放映されたのは、昭和六十一年で、前年の「忠臣蔵」に次ぐ二作目だった。脚本は杉山義法、主題歌「愛しき日々」は作詞小椋佳、曲と歌は堀内孝雄である。

「風の流れの激しさに」で始まるこの歌は、終わりの「もうすこし時がゆるやかであったなら」が哀愁を誘って大ヒットした。CD販売は四〇万枚を記録、NHKの紅白に三回登場している。

出演は西郷頼母役を里見浩太朗、井上丘隅役を森繁久彌、貞吉役は宮川一朗太である。

このテレビドラマは前篇「京都動乱」が十二月三十日、後篇「落城の賦」が十二月三十一日に紅白歌合戦の裏番組として放映され、視聴率は忠臣蔵を上回る一七・二％を記録した。白虎隊自刃の場面は残念ながら「お城が燃えている!」という落城誤認であるが、極めて完成度の高い内容と言える。特に、貞吉が伯父の頼母に出陣の挨拶に行き「会津は負けるんですか?」と聞くと、頼母は「生死を超えたところに真の勝利がある」と答える。翌日、敗走した白虎隊士が自刃について議論の中で、頼母の言葉の意味は「死んで会津を不朽のものとする」と悟るというシナリオは深さがある。

テレビ朝日系では平成十九年一月六日、七日の正月番組と

して「白虎隊」を放映した。脚本は内館牧子で、主人公は愛大クマで知られる酒井峰治で山下智久が演じた。頼母役を小林稔侍、千重子役を浅野ゆう子が演じた。視聴率は一七%と高率であった。

テレビ東京系では平成二十五年一月二日に新春ワイド時代劇として、「白虎隊 敗れざる者たち」を七時間番組として放映した。脚本はジェームス三木、主題歌「風歌」は加藤登紀子である。頼母役は北大路欣也、千重子役は黒木瞳で、白虎隊登場場面の視聴率は七・五%である。

NHKの大河ドラマでは平成二十五年に「八重の桜」が放映された。これは会津藩士山本覚馬の妹山本八重の生涯を綴ったものである。なお、八重はのちに同志社を創立した新島襄に嫁いだ。脚本は山本むつみ、主演は綾瀬はるか、頼母役は西田敏行、千重子役は宮崎美子である、白虎隊自刃の場面は六月二十三日に放映されたが、上記の三本が全て「落城誤認」であったのに対して、初めて「お城が燃えている」というシーンを避けた。なお、この日の視聴率は一二・九%となっている。

オペラ

平成二十六年七月二十七日～二十九日に「オペラ白虎」が会津風雅堂で上演された。これは福島復興復活オペラプロジェクト

エクトとして企画されたもので、主催は地域振興芸術委員会である。台本は宮本益光、曲は加藤昌則、演出は岩田達宗、指揮は佐藤正浩。

主要な登場人物は、貞吉、貞雄、頼母、千重子の四名。晩年の貞雄が、出陣から自刃までの貞吉を振り返り、生と死を巡って頼母と張り合う様子をオペラ化したもの。

千重子が子供たちを次々と刺し、

なよ竹の 風にまかする身ながらも

たわめ節も ありとこそ聞け

を詠んで絶叫するシーンが凄い。この歌はやがて踏み込んでくる西軍兵士に対して「あなたの方の思うようにはさせませんよ」という意味であり、気迫がこもっている。

巷には、「足手まといにならないように自刃した」という俗説が横行しているが全く違うのである。

なお、オペラ白虎は戊辰一五〇年の平成三十年七月末に、再演された。

絵画

白虎隊自刃の図は主として会津出身の画家によって描かれている。主な作品と描かれた白虎隊士の人数を以下に示す。

明治二年 穂積朝春 会津元青龍隊士 一五名

明治十六年 渡邊文三郎 岡山（備中） 一六名 石版画

忠臣義士

明治三十六年（一九〇三） 石川桂堂 会津長尾氏の出身

一九名 銅版画

明治四十四年（一九一一） 梅里（飯沼貞雄の絵師） 一六

名

大正八年 渡辺東郊 会津元朱雀隊士 一五名

昭和十年 佐野石峰 会津 一九名

昭和五年 渡部菊二 会津 二〇名

なお、渡部菊二の絵は、イタリアからの記念碑寄贈に対する返礼として会津若松市からの依頼に依って一年半をかけて制作し、イタリアに寄贈したという。

書籍

白虎隊の書籍も沢山出版されている。以下、主なものを列挙する。

明治二十年（一八八七）十一月「白虎隊一六士伝」関場忠武、明治二十四年（一八九二）一月「白虎隊勇士傳」二瓶由民、明治二十七年（一八九四）六月「白虎隊事蹟」中村謙、大正十五年五月「会津白虎隊十九士伝」宗川虎次、昭和三年三月「戊辰戦争と白虎隊」堀内潤平、昭和十九年四月「白虎隊」佐藤民實、昭和五十一年十一月「燃える白虎隊」片平幸三、平成十一年六月「会津士魂—白虎隊の悲歌—」早乙女

貢、平成十三年五月「白虎隊」中村彰彦、平成十四年五月「白虎隊と会津武士道」星亮一
白虎隊の自刃理由については、明治期に発行された三つの書籍では明記していないが、大正以降のものはすべて、「落城誤認」となっている。

会津藩侯行列と子孫隊



図9 会津藩公行列子孫隊（平成30年9月）

会津若松市のホームペー
ジによると、
会津まつりは、
昭和三年に
「若松市祭」
として大行
列が催された
ことが起源と
されている。
戦後になると、
市観光協会が
主催となって
昭和二十八年
十月に第一回

会津まつりが実施され、「大名列」は第四回より「白虎行列」と名前を変えた。会津まつりは先祖に感謝する市全体の統一祭という意味合いから出発し、やがて昭和三十二年の戊辰九〇年祭を契機にその性格を観光祭に改め、「白虎行列」を中心に鶴ヶ城と白虎隊の歴史を打ち出すようになり、「白虎行列」は昭和五十九年の「鶴ヶ城築城六〇〇年まつり」からは「歴代藩公行列」とされた。藩侯行列は戊辰戦争時代をメインとした武者行列であるが、先人に対する感謝と慰霊、鎮魂の意味合いがある。

会津藩子孫隊は遊撃隊組頭小池繁次郎（戸ノ口原で戦死）の「子孫木田孝生氏の発案で直系の会津藩士の会を作り、平成十年に藩公の護衛役として行列に参加したのが始まり。それから五年毎に参加し戊辰一五〇年で五回目となる。会津藩士先祖の役回り名を肩に付け甲冑をまとった約三〇〇名の子孫が、「義に死すとも、不義には生きず」の旗を掲げて行進するのが特徴である。

むすび

平成三十年十一月十七日、会津飯盛山白虎隊士墳墓域が国登録記念物に指定されるとの報道がなされた。文化庁の説明によると、史跡記念物とは「貝塚、古墳、都城跡、城跡旧宅

等の遺跡で我が国にとって歴史上または学術上価値の高いもの」となっている。

白虎隊墓地は飯盛家の個人所有物であるが、幾度かの墓域拡張・整備を経て会津弔霊義会が長年に亘って管理し白虎隊の慰霊を実施してきたことは本稿で説明した通りである。これが、歴史上価値の高いものとして、公的に認定されることの意義は大きい。

ところで、国が認める白虎隊の歴史上の価値とはなんだろうか？

「子供たちが落城したと早とちりして、もうこれまでと思いきや自刃した」という通説ではあまりにも情けない。「子供たちの勘違いが原因の悲劇」なら国の認定は不要である。

筆者は、「ならぬことはならぬ」を貫き通した白虎隊の「義」こそが、国が認めるに値する歴史上の価値であると考えられる。会津には「義に死すとも不義に生きず」という言葉がある。白虎隊はこの言葉を正に具現したのである。

折しも、小中学校の学習指導要領が一部改訂され、これまでの「道徳の時間」が国語や算数と同じ特別の教科道徳に変更となり、小学校は平成三十年年度から、中学校では平成三十一年度から実施される。道徳教育の専門家である古川雄嗣氏は、カントの道徳哲学は「ならぬことはならぬ」という武士道精神であると言い切っている（文献二）。

本稿では、白虎隊士がどのような教育理念のもとに育ったのか、いわれなき朝敵の汚名を着せられた理不尽にどのような立ち向かったのか、集団自刃という悲劇がなぜ起こったのか、事件後この悲劇がどのように取り上げられてきたのか、

参考文献

- 〔文献一〕「史実会津白虎隊」 早川喜代次 新人物往来社 昭和五十一年八月十日
- 〔文献二〕「会津戊辰戦死者埋葬の虚と実」 野口信一 歴史春秋社 平成二十九年十月十一日
- 〔文献三〕「会津白虎隊のすべて」 佐藤一男 小松山六郎編 新人物往来社 平成十四年二月十日
- 〔文献四〕「日向君招魂碑と内記の斗南救援工作」 飯沼一元 会津史談第八七号 平成二十五年四月
- 〔文献五〕「白虎隊精神秘話」 飯盛正日 歴史春秋社 昭和五十六年十月二十五日
- 〔文献六〕「歴史と旅―壮烈会津白虎隊特集」 白虎隊記念館編 秋田書店 昭和五十七年
- 〔文献七〕「白虎隊事蹟」 中村謙 明治二十七年 河井源蔵編 国会図書館
- 〔文献八〕「白虎隊の戦闘行動と自刃の決定プロセス」 飯沼一元、平成二十二年三月三日 会津人群像No.一六 歴史春秋出版(株)
- 〔文献九〕「会津と長州」 飯沼一元 会津史談第九二号 平成三十年四月
- 〔文献一〇〕「白虎隊士の自刃者につき陳情報告」 吉村五郎 会津史談会誌第一四号 昭和十一年八月
- 〔文献一一〕「大人の道徳」 古川雄嗣 東洋経済新報社 平成三十年八月九日



PROFILE

石田 明夫
いしだ あきお

1957年生まれ。
（一社）会津歴史観光ガイド協会理事長、NPO法人会津阿賀川流域ネットワーク理事長、会津古城研究会会長、会津ユネスコ協会事務局長、白虎隊の会理事、日本考古学協会員。焼物、戦国の城、戊辰戦争の陣地、「天地人」の時代考証・「八重の桜」に協力。



PROFILE

飯沼 一元
いゐぬま かずもと

1943年、仙台市生まれ。蘇生白虎隊士飯沼貞吉（後貞雄）の直系の孫（貞雄二男一子の三男）。1961年、宮城県立仙台第一高等学校卒。1965年、東北大学工学部電子工学科卒。1970年、東北大学で工学博士取得。同年、日本電気(株)へ入社。研究所で画像処理を担当し、MPEGの基本特許発明。後、本社理事支配人。2002年、(株)ライステックを設立し、「食べる米ぬか」のベンチャー事業に携わる。2010年4月に白虎隊の会設立。著書に「白虎隊士飯沼貞吉の回生」他あり。

などを唯一生き残った貞吉の手記・取材記録・絵画に加え、戸ノ口原の実地検証ならびに各種の関連資料を用いて整理してみた。

信じられないような殺人事件や汚職、自分ファーストの風潮を目にすると、世の中から「義」が消えつつあるような不安を覚える。利を追求することは悪いとは言えないが、「義」を忘れてはならない。白虎隊の「義」が後世に引き継がれていくことを切に願っている。